
愚者は踊る

君河月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者は踊る

【Zコード】

Z9710W

【作者名】

君河月

【あらすじ】

異世界召喚冒険もの、気がつけば異世界に勇者として召喚された俺、このまま流されていけば面倒臭い事になるのは目に見えてる。誰が連中の思い通りになつてやるもんか……。同じく召喚された女の子と共に、逃げ出そうと思う。

主人公は最強と云つよりもチートです。テンプレ、「都合主義あり。初めて文章を書きます、練習も兼ねておりますので、拙い面も多いと思いますが、それでも宜しければ。

……それで、これは何処ですか？

ん？ああ、いきなりだけじ、俺の説明をしておひづ。

俺の名前は、雪村遙、女顔がコンプレックスの、ちょっとおちゃめな16歳だ。

朝早く……と言つても8時位だったが、学校に登校の途中、昨日は深夜遅くまで、B級映画を見ていたのが悪かったのか、寝惚け眼まなこで歩いていたんだが、気がついたら知らない場所に立っていました……。

あれ？ 寝惚けて変な所に出ちゃいました？

いやいやいや、待ってくれ、いくら寝惚けていたとしても、こんな通い慣れた道で、こんな場所に来れる訳が無いだろ？

……それで、ここは何処ですか？

薄暗い十畳程の空間に、足元に輝く魔方陣、奇妙な格好のジジイ共、甲冑に剣や槍で武装している兵士？があり、昔見たアニメのワニシーンの様だなど、場違いな事を考えながら、文字通り開いた口が塞がらなかつた。

「ああ、見事だ、いつも容易く成功させるとは

「ハツ！ 有難う御座います」

「で、いやつも勇者であろう?」

「はい、恐らくそつかとは思われますが、まだ判断は致し兼ねます、この様な間抜け面をしている者が、勇者かと思つと甚だ不本意では御座いますが」

「ムツ! 間抜け面つて、俺のことですか、俺のことですね。さつき返掛けた顔をしていたと思うから。しかしここからの、人を值踏みするような目は、不愉快極まりない。」

「まあよい、使えるか使えぬかは、後で試せばよい」

「はい。そうかと思います」

ローブ? を着ているのと、宝石等で華美に着飾つてジジイが居るが。一人とも、どう見ても日本人には見えない。兵士は兜を被つてるので、俺には判断しようが無いのだけど。

あれ? そう言えば、「いやつも」とか言って無かつたか、何故に複数形なのだ?

ん? さつきは呆然としていて、気が付かなかつたが、部屋の隅に女の子がいる。

黒髪ロング、美少女と言つ存在を指すのなら、彼女の事を言つんだろうなと思わせる。容姿の持ち主だった。しかし、どこかの学校の制服を着ているし、どう見たつてあれ……日本人だよな?

多分だろうけど、彼女もここに連れてこられたのだろうか、酷く怯えている様に見える。

「それより、大事があつてはこことなる、いやつらに魔術をかけておけ」

「ハツ！ 畏まりました」

隅に立っていた兵士に、ロープを着たジジイが命令をし、俺を彼のそばに引つ張つて行つた。

俺を彼女の横に立たせると、ロープを着たジジイが、ボソボソと何かを唱えだした。

魔術つて言つていたよな？ 魔術なんて物があるのか？

……って、魔術ですか！？

……仮にあるんだとして、何の魔術なんだ？ 嫌な予感がする。
……寧ろ、嫌な予感しかしないが、気付けば魔術？ が完成してい
た。

『この者たちに、臣なる者への隸属を』

ロープを着たジジイが、手に持つていた杖を、俺達の方に向けると、杖先から怪しい光が、俺達を包んだ。俺は驚き、反射でしゃがみ込んだ。しかし光こそ浴びてはいるが、何とも無い。

んん？ これが魔術？ ふと気になり、同じように光を浴びてい
る、彼女の方を横目で見てみると、何故か苦しんでいる様に見て取
れた。

あれ？ 何で苦しそうにしているんだ。俺は驚きはしたが、
特に痛かつたり苦しかったり、しないのだが……？

彼女が苦しんでいるのに、俺だけ平気なのも、もしかしたら、怪しく写るかもしれない。俺は誤魔化すよつて、苦しむ演技をしておいた。すると次第に光が収まつていぐ。

「どうだ、魔術はかかつたか？」

「はい、『隸属の魔術』は問題ありませんでした」

演劇経験が、特にあつた訳では無かったが、特に怪しまれずに済んだようだ。

しかし『隸属の魔術』ってなんだ？どんな魔術を俺達はかけられたんだ。

隸属つて事は、何かに従わせる魔術か何か……？

「そうか、良くなつた！ では、わしはもう戻るが、後の事は任せたぞ」

「はい、お任せ下さいませ」

ロープを着たジジイが、恭しくお辞儀すると。着飾つたジジイが、部屋から出て行つた。

「おーーーー！ やつらを連れておけ

ロープを着たジジイが、兵士に命令をし、俺達を、何処かに連れて行こうとしている。

抵抗しようとも考えたが、俺が暴れることで、彼女にも迷惑をかけるかもしれない。

なにより、武装している相手に敵うほどぞ、喧嘩に自信がある訳で

もないでの、俺は抑えておいた。

俺達が連れてこられたのは、さつきいた召喚の間（便宜上俺が命名）より、倍ほど広さを持つ部屋だった。

とりあえず、連れて行かれている間に分かった事は、ここが地球では無いって事だ。

空に太陽が、大小で2個存在した。

地球上太陽は2個も無いからな。

日照問題とか、紫外線とか、大丈夫なんですかね？

兵士達に連れて来られた部屋には、メイドさんが居た……もう一度言つが、メイドさんが部屋で待つていた。

……なんでメイドさんなんだ？

整えられた銀髪、気の強そうな瞳で、小柄ながら出でるといひは出ている。

所謂、トランジスタグラマつてヤツだろ？

それにしてもこちらに来てから、美人と出会う機会が多いなど、俺は埒も無い事が思い浮かんだ。

兵士は俺達を椅子に座らせると、入り口の前を陣取った。

俺達を逃がさないって、意思表示でしょうか？

……メイドさんは俺達が着席するのを確認すると、立ち上がり。

「初めまして勇者様方、この度勇者様のお世話及び、事情等の説明を任せさせて下ります。

侍女長のセイナーレ・パルメイラと申します。以後お見知りおきを」

メイドさん改めセイナーレは、とても優雅にお辞儀をした。もの凄く絵になる光景だなと、見っていたら。

「あ……あの、わたしを、ここから帰していただけますか」

「……迄一切喋らなかつた彼女が、口をひらいた。

「……わ、わたし、勇者なんかでは無いです。お願ひですか、わたしを元の場所に帰して……下さい」

語尾が少し上ずつていた。いきなりこんな場所に、連れてこられたら、そりや怖いだらうな。

「申し訳御座いません。^{わたくし}私には、その^ご希望を叶える事は參りません」

「そんな！ なんですか！？」

「私は、その様な判断を、任せている立場では下りません。もし、その様な判断が出来ますとしたら、国王陛下のみかと思います」

「だったら、その国王様に貴女から言つて下せー」

「申し訳ありませんが、それも叶いません」

「そんな、なんで！？」

「私には意見はおひが、お田通りすら叶いませんから」

「そ、そんなあ……」

いきなり連れて来られて、それで帰れませんって。納得する
方が無理だろう。俺だって無理だ、だって残してきた物あるもん。
……ゲームとか積んでいた本とか……あれ？ 悲しくないのに田
から汗が。

つて、ヤバイ！ もし帰れないのだとしたら、誰か！ 僕の部
屋のＰＣを爆破してくれ！？

……なんて俺は心の声をおぐびにも出さない、この場でセイナー
レに、そんな事を言つても詮無いと想つたので、この場では他に気
になつていることを、訊く事にする。

「事情の説明つて言つたよな。だつたら訊きたいんだが、ここは口
本では無いのか？」

太陽が2個あるんだから、日本では有り得無い場所なんだけど、
確認の為に訊いておいた。

「はい、ここは日本と仰る、場所では御座いません。私達が住むこ
の世界は『ガイア』と申し。」

そして、今、現在居ります場所は、『レニール大陸』にあります。
『神光国家プレクスタ』と申します」

「では、IJIは地球では無いのだな？」

「はい」

嗚呼……案の定、地球ですら無かつたか。
彼女の方も、訊いた事の無い地名を出されて、困惑の表情を浮か
べていた。

「IJIが日本じゃないんだとしたら、何で俺は言葉が通じるんだ?
IJIで使用されている言語が、日本語って、訳じゃ無いんだろう」

「はい、IJIで使用されております。言語はエスペラント語と申
します」

「へ？　へえ、エスペラント語ねえ……地球で使われる物と
は、別物だとは思つが、ここでエスペラント語を、聞くとは思わな
かった。

「だつたらなんで、俺には解るんだ？」

「私もきちんと理解しておりませんが、勇者様方には、此方の言
語は、やつらう物だと考えて貰つて貰つて構いません」

「まいかり辛かつたが、現実言葉自体は、通じているのだが
ら、そういう風なものだと、考えるしかないか。

「で、俺……いや俺達の事を勇者……だなんて呼んでいるが、結局

の所、なんで俺達はここに呼ばれたんだ?」

勇者で召喚だなんて、薄々感じてはいたが、案の定、予想通りの答えが返ってきた。

「勇者様方が呼ばれました理由」と申しますか。お願ひを申します。先程もご説明致しました。ここ『ガイア』には、嘗て魔王と呼ばれる存在が、封印されておりました。しかし、その封印が弱まり、魔王が甦つてしましました。

その影響で、大陸全土の魔物達も活性化し、魔物により人的被害が増えてき、それ故に、国より出ての開拓も儘ならず。國同士が肥沃な大地を求め、戦争までおき始めたのです。それを憂えた吾が国は、勇者様方を御呼びしたのです。」

まあ、想像通りと言えば想像通りか……しかし、魔王と勇者……ねえ?

どこぞの御伽噺か、良くあるRPGのテンプレみたいだな。で、それを俺達にしろってか?

……嗚呼、何て面倒臭い。

「勇者だなんて、わたしにはそんな力ありませんよー?」

「それは」安心ぐださい、勇者様方は、こちらに召喚されました時点で、身体能力が強化され、特別な力に目覚めていると思います」

身体能力強化に、特別な力ねえ?『ご都合主義もいい所だな。少し気にもなったので、訊いてみた

「それが分かるって事は、他にも、勇者ってのはいるのか?」

「いいえ、私が知る限りでは、勇者様の召喚は行われて下りません。他国についても同じだと思われます。そして、その情報につきましては、過去の勇者様達について書かれている、文献の記述を基より得た知識で御座います」

つまり過去、俺達のように、ここに呼ばれた人間が入るって事か。
……文献になるって事は、かなり昔の事なんだろう。

「ではその勇者が、魔王を封印したのか？」

「……いえ、私はそこまで存じて下りません」

何でここで、言い黙る必要があるんだ？ 力の事とかが、そこまで分かっていて、そこが分からないとか……魔王封印とかでは無く、違う目的にでも、利用されたのか？

「だったらその勇者は、田的を果たした後はどうなったんだ？」

「……存じ上げて下りません」

都合の悪い事には濁すか黙りですか……まあいい、後で調べれば分かるかもしね。

それよりも、俺が尤も気になっていたことを、訊いてみる事にした。

「で『隸属の魔術』とはなんだ？」

「『隸属の魔術』ですか」

「ああそうだ、俺がここに召喚された時に、ローブを着たジジイにかけられた物だ」

セイナーレは少し逡巡したが、答えた

「《隸属の魔術》とは、対象を永続的に隸属させる制約魔術となります。

恐らくですが、勇者様には、ブレクスタの王族に服従を誓う物を使用されたかと思われます」

「クソッ！ 予想通りかよ……それで何が勇者だ！ 隸属とか服従って、奴隸と大差無いじゃないかよ！」

横で話を聞いていた彼女は、絶句していた。

「具体的にはどうなるんだ？ 例ええばそれに逆らつたとしたら？」

「かけられた時に経験が御座いますでしょうが、王家の者の意に沿わぬ行動をすれば、魔術をかけられました時の、数倍の痛みが全身を襲います」

「痛み……？ 僕はあの時、全く痛いとか感じ無かったんだが。しかし、彼女の方は、それを聞き更に蒼褪めた顔をしていた。

「で、それを解く方法はあるのか？」

「……いえ」

「わかった、つまりは俺達に拒否権は無いって事だな」

「…………」

なるほど 帰れるかどうかでは無く、帰さない心算なのだな。
そんな魔術を使うくらいだ、態々奴隸にそんな心積もりをする訳が
無い。

……お願い誰か！ 今すぐ俺のPCのHDDを破壊して！

「何故、それを話そうと思つたんだ？ それを自分の判断で、言つて良かつたのか？」

「いずれ勇者様方には、お耳に入ると思いますので」

遅いか早いかの違いでしかないと、云つ事だらう。そうだよな、どつせ身を持つてその効果を、知る事になるかも知れないのだ。

「勇者様方に、こちらをお渡ししたいと思ひます」

セイナーレは立ち上ると、横にある机の上から、皿ごとプレートを取り出し、俺達に渡してきた。俺達にプレートを受け渡すと、セイナーレが説明を続けた。

「ではまず、こちらに血を一滴垂らしてみて下セー

ん？ 血……だと？ それを訊いて俺達は訝しがんだ。

「勇者様方は、『自身の能力を把握しておられないと思います、です』の『こちらを』用意させて頂きました。元々『こちら』プレートは、

ギルドで使用されて下ります物で、血を垂らしますと、その方の能力などが登録され、確認する事が可能となります。」

なるほど、ゲームとかでよくある、ステータスメニューみたいなもんか。さつきの説明を訊いた後で、血を垂らせとか言われたら、そりやあ警戒もするだろ。

しかし、やらなければ話が進まないし、現状把握の為にも、やつておいた方が、良いのだろう。そうでなくても、俺達に、拒否権など無いのだから。

俺は親指を噛み、指先を出血させた……血がボタボタ垂れている。一滴所では無くなってしまった。思い切って、噛み過ぎてしまのだ。己むを得ず、プレートに血を垂らした。あー痛エ。

彼女の方も、俺がプレートに、血を垂らすのを確認すると、セイナーレから針を借り、指先を軽く刺し、血を垂らしていた。……つて、針あるのかよ！？

暫ぐすると、プレートに青白い文字が浮かび上がった。

名前：雪村遙

AGE : 16

SEX : 男

LV : 1

JOB : 愚者

HP : 62

MP : 1084

STR : 66

VIT : 52

A G I : 71

D E X : 101

I N T : 4712

R S T : 9877

L U C : 558

称号：なし

特性：無詠唱、魔術感知、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効

装備：学園制服

祝福：なし

ギルド：なし

未だ名乗つて無い筈の、俺の名前や年齢が、正確に書かれている。

確かに便利だな。ふむ それでこれが、俺の能力か……。

しかし、この職業『愚者』^{フール}って、何だよこれ？

それに何というか……数値が、魔術特化しすぎだろう。こんなアンバランスな能力で、まともに戦う事が出来るのか、俺？

彼女の方も文字が浮かんだらしい。らしいってのは、俺には、彼女のプレートの文字が、読めないのだが、彼女は難しい顔で、プレートを睨み付けていたからだ。

俺はどういうことだと、セイナーレを見た。

「言い忘れておりましたが、こちらのプレートは、ご本人様と、ご本人様が許可された方のみ、内容を確認する事が可能になります」

なるほど、そう云う事ですか。こんな世界なのに個人情報保護に御親切な事で。

「そういえば、過去の勇者も俺達みたいに、一人とか三人で呼ばれたのか？」

「いいえ、私が知っている限りですが、召喚されました勇者様は、お一人づつだったと思います」

「では、何故今回は、二人も呼ばれたんだ？」

「いえ、私は存じて下りません」

多分だが、どちらかが保険だろうな。なんせ俺の職業が『愚者』なんだし。もしくはそれだけ、この国人間は切羽詰っていたのか。

「他に、何か」質問は御座いますか

「いや、今はもういい」

これ以上突っ込んで、答えて貢えるとも思えないし。

「はい、わたしも大丈夫です」

「左様で御座いますが、了解致しました では、勇者様同士で、お話もあると 思います。

私共は暫し、此処を離れさせて頂きたいと思います」

ん？ 良いのか、俺達だけで話をさせて、逃げる為の算段をつけとは思わないのか？ つて、ああ なるほど、さつき言つていた『隸属の魔術』の効果か。

……つまりそれだけ、その魔術の効果に自信があるって事ですか。

「では、暫し失礼致します」

セイナー・レは俺たちに頭を下げる、扉の前を陣取っていた兵士を連れて、本当に部屋から出て行つた。……本当に出て行つたよ。

「…………」「

お話つて言われても、何を切り出せば良いんだらうな…………？しかしまあ、お互黙つて見詰め合つて、どんなお見合いだよ！？
とりあえず、思いついた事を話題として、思い切つて声をかける事にした。

……意外にシャイボーキなんだよ俺。

「君は…………日本人だよね？」

「えつと。はい、そうです」

やはり日本人か、勇者つて云うのは日本人しか呼ばれないのか？
まあいいや、これも後で調べてみたらわかるかも知れない。

「ああ、良かつた。俺は雪村遙つて言つんだ。よろしく」

俺は彼女に、手を差し出した。

「わたしは五十鈴雪緒と言います。よろしくお願ひします。雪村さん

彼女改め五十鈴さんは、俺の差し出した手を、ジッと見つめていた。

「俺の事は遙で良いよ、後握手のつもりだったんだけど、五十鈴さんは嫌……だつたかな？」

「い、いえ、そんな事は無いです。あと、わたしも雪緒で良いですよ」

雪緒は俺の科由を訊き、少し躊躇いながらも、手を握ってきた。

すべすべして、綺麗な手だなーと、思っていたら。雪緒は、俺の顔と手を見つめながら、尋ねてきた。

「え、えつーと、あの、遙をひって男性なんですか？」

……ハイ？

「えつ！？ チョットまって、今まで俺の事、女だと想っていたの！？」

俺、自分の事を俺つて呼んでるんだよ、この服だつてどう見ても男物だよ？」

「」の格好どう見たつて男だろ？、学校の制服はブレザーダけど、ズボン穿いているんのこ。ここきて気が付くとか……確かに実名と相まって、間違われる事あるけどや。

寧ろ、間違われる事ばかりだけじゃ。」の格好の時くらいは、気付いて欲しかったよ。

「」のめんなさい、綺麗な顔をされていたので、つつきつ男装を

された、女性なのかと……」「

グサッグサッ、ま、まさか敵でもない筈の彼女に、ダメージを与えられるとは思わなかつた。

既にかなりのダメージを受けてはいるが、これ以上言われると、さすがに立ち直れそうにも無いので、急いで話題を変えることにした。

「そうだ！ 雪緒は歳幾つなのかな？ 見た感じだと、俺と大差無いと思うのだけど」

「わたしは清蘭学園の一年で、17になります」

「へ？ 清蘭？……清蘭つて、あの清蘭？」

「は……はい、恐らくその清蘭だと」

清蘭と言えば、元の日本では超有名なお嬢様学校ではないか、学力のレベルも然る事ながら、容姿のレベルの高さも有名な学校だ、雪緒の顔を見れば、そのレベルの確かさを垣間見れるが。

「そうかー、清蘭かー」

しみじみ言つてゐる俺、傍から見ていたら、気持ち悪い事この上ないだろ？。

いや、だってや、清蘭つて言つたら凄いんだぜ、元の世界で、清蘭に知り合いが居るつて言つたら、羨ましがられるだろ？な……。しかし今考える様な事でも無いし、頭を切り替えるか。

「俺はしがない高校の一年、雪緒と同い年つて事になるのかな、だ

から俺に、なんづけなんか要らなーから

「あ……やうなんですか」

同年代と聞いて、雪緒ははにかんだ笑顔を見せたた。かなり可愛いです。

「それで雪緒は、ここに来るまでの事を憶えているか?」

「…………ですか?」

「やつ、思ひ出せる範囲で構わないから」

雪緒は、悩むまつに首を傾げながら、答えてくれた。

「わたしは学校から、帰宅の途中だったんですが、気が付いたらあの場所に立つて居ました」

「…………そつか」

「それ以上の事は、ちょっとと思ひ出せそうに無いです」

「ふむ、なるほど、状況は、俺の時と大差は無いのだな。それにしても、帰宅途中……か、俺は登校中に攫われたが、時系列が違うのか?」

「田元ちとかは憶えているかい?」

「はー、確か10月14日だったと思います。時間までは……

俺も確か10月14日だつた筈だから、俺の方が先には飛ばされていたのか……。

まあしかし、こまま考えていても仕方ない。

「あのさ良かつたら、そのプレートを見せて貰つても良いかな？」

「はい、遙くんにだつたら良いですよ」

おおう、よくこんな短い期間で、彼女の信頼を得られたもんだな俺。

まあ同郷出身で、同年代つてのが、大きいのだらうけど。

……しかしまあ、くん付けか、この際妥協案として仕方ないか。

雪緒からプレートを受け取ると、さつきは見えなかつた文字が、見える様になつていた。

確かに本人と、本人が許可した人しか見えないようだな。少々関心しながらも、俺はプレートの内容に目を通した。

名前：五十鈴雪緒

AGE : 17

SEX : 女

LV : 1

JOB : 勇者

HP : 204

MP : 138

STR : 176

VIT : 189

AGI : 186

DEX : 181

I N T : 1 1 2

R S T : 1 4 7

L U C : 9 8 8

称号：プレクスタの隸奴

特性：危機感知、高速治癒、高速移動、高速詠唱、見切り

装備：清蘭学園制服

祝福：なし

ギルド：なし

これが雪緒の能力か……^{ステータス}職業《勇者》つて事は、雪緒が勇者なのか。本来は、この位の数値が普通なのだろうか？　だとすれば俺の数値は極端すぎるな。

何より俺は、雪緒と較べるとライフと攻撃力が低すぎる。紙と言つてもいいかも知れない、本当に俺は戦えるのか？

それに……んん？　　この称号の《プレクスタの隸奴》つてなんだ？

俺の方には書かれて無かつたよな。俺は確認の為に、プレートを取り出し見てみた。

名前：雪村遙

A G E : 1 6

S E X : 男

L V : 1

J O B : 愚者

H P : 6 2

M P : 1 0 8 4

S T R : 6 6

VIT : 52

AGI : 71

DEX : 101

INT : 4712

RST : 9877

LUC : 558

称号：なし

特性：無詠唱、魔術感知、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効

装備：学園制服

祝福：なし

ギルド：なし

やはり俺の方には、称号自体が書かれて入ない。職業の違いは良いが、俺の方に無いのは何故なんだ……？

そう言えばセイナーレが、俺達にかけられた『隸属の魔術』は、制約魔術とか言ってなかつたか。

俺の特性の中^{アビリティ}に、『制約魔術無効』なる物が書かれているが、もしかして、この特性で無効化されたのか？

……だとすれば、俺のこの状態を他の人間に、知られる訳にはいかなくなつた。

もしされたら、他の手段を使われかねないし、何より首輪が繋がつていなき犬を、奴らが飼おう何て思わないだろうし。

不幸中の幸いだが、このプレートは俺と許可した相手にしか見えない。

だからと言って、これは慎重に取り扱わなければ為らないのは確だ。

かだが……。

これから対応に思い耽つていると、雪緒の声で現実に引き戻された。

「あたしも、遙くんのを見せて貰つても、良いですか？」

これは如何するべきだらうか、断ると言ひ選択肢も無くは無いが。

下手に隠し立てをして、後で知られてしまつと、今ある彼女の信頼を失いかねない……今の俺にどうしてそれは、あまり宜しくない。

本当は見せない方が良いのだろうけど、これから的事を考えれば、俺一人でやるにも限界がある。

……彼女に素直に見せて、手伝わせた方が良いか。

「ああいこよ。だけこれを見て、気になる事もあるかも知れないが、なるべく声には出さない様に気をつけて貰えるかな」

「？ わかりました」

雪緒は良くわかつてなかつたみたいだが、俺は手に持つていた、自分と雪緒のプレートを手渡した。

雪緒はそれを受け取ると、俺のプレートに目を通した。

「……え？」

あ、やはり雪緒は気が付いたようだ、俺のと自分のを見比べている。

気にはなるだろう、隸奴つて書かれているものが、俺の方には無いのだから。

もしかしたら、それが自分を縛っている、魔術なのかも知れないのだから。

雪緒は困惑した表情を、俺の方に向け訊いてきた。

「あの…… これって、どうして……？」

気には付いたが、理解は出来ては無い様だった。恐らく雪緒は、RPGゲームの類をした事が無いのであろう。いやもしくは、薄々は気付いているのだが、確認の為に俺に訊いてきているのかも知れない。

……しかし、如何答えた物かね。

この部屋は、盗聴されているのかも知れないしな。今まで話していた、俺達の会話を、こここの奴ら聞かれている可能性は十分ある。俺が奴らと同じ立場だったら、そうしてゐるし。そう行動する。

部屋の文明レベルを伺つからに、盗聴器なる、ハイテクな物は、存在しないだろうが、魔術の類で出来るかもしないし。訊けるかも知れない

……ふと、そういうえば、俺の特性の中に、《魔術感知》なる物があつたよな。もしそれが、魔術無効化みたいに、使えるのならば、調べられるかもしねり。

魔術　　か、いまいち良くなはわから無いが、あのジジイが使つた《隸属の魔術》をイメージしながら、眼を瞑り辺りを集中してみた。すると何と無くだが、大気中にフワフワと漂う魔力の流れを感じた。

初めてなのに、とても懐かしく感じる、空間の違和感。

「これが魔術か……俺は一度魔力^{マナ}の存在 流れを感じ始めたら、次第に辺りに存在する魔術を、感覚でだが分かり始めた。

今もしこれを、人に説明しようと言われても、そう云うものだとしか、説明しようが無いのだが、確かに俺は今、魔術を理解している。そう知っているのだ。魔術を。

更に、この部屋を重点的に、魔術を使用されていないか探つてみたが、魔術を使用された跡が無かつた。

如何言う事だ？ 今だから判るが、この部屋には何の魔術も仕掛けられていなかつた。何の警戒もせず、俺達に会話を許したのか？いや、それだけ俺達にかけたあの魔術に、自信があつたって事なのか……。

でも今まで、俺みたいな例外も居なかつたのか？

まあいか、一々対策を考えなくて済むのだから、それならそれで好都合だ。

先程の雪緒の疑問に、少し声を控えながらも、俺は答える事にした。

「多分……だけど、俺には、魔術の類が効かないのかも知れない。プレートを見て分かるかも知れないが、俺には魔術無効なる特性^{アビリティ}を、持つているらしい」

「……だとしたら、遙くんだけでもここから逃げ出せるのでは？」

俺は首を横に振りながら、答えを返した。

「いや、元の世界に帰れるかどうかも分からないし、現状情報が足りない、それに俺だけが逃げ出せば、雪緒に当たりが強くなるかもしない」

「そんな！ わたしは大丈夫ですから」

雪緒も薄々気付いてはいるのだろうだろう、奴らは俺たちを帰す気が無いのを。

ただ、簡単に現実を受け入れるほど、俺は大人ではない。

「それに……」

「それになんですか？」

「俺が逃げた事で、その埋め合わせをする為に奴らが、再び勇者召喚を使うかもしれない」

「あ！」

雪緒も、思い当たつたのであろう、奴らは使い捨ての駒のように、地球から人間を呼ぶ可能性があることを……。

俺達を呼び、いきなり『隸属の魔術』何て物を使ってくる連中だ。俺が消えれば、直ぐにでも代わり人間を呼んだりするだろう。

それは避けたい。此方の世界の住人がどうなろうかは、俺の知った事ではない。

が、しかし、俺のせいで、地球からまた人が呼ばれるような事になるのは、それはなるべく避けておきたい。

「だから……もし逃げるのだとしても、俺達を召喚した方法を破壊（こわ）した上で……。

雪緒、君も一緒に無いと駄目だ」

「あ、えっと。あ……あの、ありがとうございます」

もの凄く嬉しそうな顔を、されてしまった。

俺としては、そう云う心算で、言つたのでは無かったのだが。

……まあ、いいか、好感を持たれて悪い事は何も無いのだから。

「だからこの事は伏せておいて欲しい。それにもしかしたら、俺の能力で、雪緒にかかる魔術も、なんとか出来るかも知れないから

ら」

「はい！ わかりました。あたしにも出来る事があるのでしたら、言つてくださいね」

これがゲームだったら、好感度上昇とか表示されるのかね。

「ああ、ありがと。とりあえず暫くは、従順な振りをして情報を集めよう。

ここを逃げるのだとしても、帰る為の方法や生きて行く為にも、基礎的な知識は必要だから」

そう、まずは情報だ……俺達が住んでいた日本は、情報化社会だった。

情報の重要性は、嫌と言つほど理解している。

なのに今の俺達は、此方の世界の事を全く知らない。

生きる為にはお金だって必要になる、それなのに、使用されている通貨単位ですか、今の俺達は知らない……。

「はーーー。」

とあ踊ろつ。俺達は操り人形では無い事を思い知らせる為

「」。

第一話 ……現実つて何時も残酷ですよね。

「おはよう」「やあこます」

う、うーん……もつ少し寝かせてくれよ、連日徹夜になつてしまい、未だ眠くてしょうがないのだ……。

つて、あれ？ 僕は一人暮らしだつたよな？
起こしてくれる人なんか居なかつたよな？

嗚呼、誰か可愛い義妹や、幼馴染が起こしに来てくれないかな……。

いや、もうなんと云つか……現実つて何時も残酷ですよね。

ああ……そうだ……次第に眠気が覚めて行き、昨日の出来事が甦つて来た。

俺は いや俺達はか、クソジジイ共に、異世界に召喚された勇者なんて云う存在らしい。
それはなんという幻想。^{ファンタジー}いや、現実はゲームほど都合良くは無かつたのだけど。

召喚、有無を言わせず強制魔術^{ストップ}……嗚呼、なんて見事な利己主義者共。

ここに居る人間は、力ある者を屈服させることでしか、安心を得られ無いらしい。

押さえつける事でしか、人は動かないと思っているらしい。
それはとても素晴らしい、なんともくだらない幻想。^{ファンタジー}

ドアのノック音が響き、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「おはようございます勇者様。そろそろお目覚めの時間になります」

……なるほど、この声で俺は微睡みの世界から現実に引き戻されたのか。

誰だ？ と思いもしたが、この世界で俺を起こして来るよな人間は限られている。

……俺が返答しなかつた為、扉を叩く音が再度響いた。

ベットから起き上ると、仕方なしに俺は扉の向こうに声を返した。

「ああ！ 起きている」

「失礼致します。朝食の準備が整つております」

俺の返答を聞き部屋に這入ってきたのは、やはりセイナーレだった。

侍女長とか言つてたよな、そんなお方が態々俺なんかを、起こしに来るなんて、苦労様な事で。……いや、だからこそか？

「準備が整われましたら、食堂の方までお越しください」

「ああ、わかった、けど俺は食堂の場所がわからんぞ」

「それは失礼致しました。では、準備が整われましたら、部屋の外に居ります侍女にお声をお掛け下さい。

その者が勇者様を食堂迄ご案内致します」

「わかつた、それでゆきお……もう一人の勇者は如何したんだ？」

「そちらの勇者様も、これから私がご連絡に伺います」

雪緒……もう一人の勇者は当然の事だが、別の部屋で寝ている。俺達が、セイナーレから説明を受けた部屋から、宿泊する為の部屋に移つたのだが。

最初に俺達二人は、ツインベットがある部屋に案内された……。

そうです、察しの良い方はもうお気づきかと思いますが……セイナーレも俺の事を女だと思っていたらしい。

女の子同士だから、同じ部屋で良いやつて考えだつたのだろう。勇者で女の子、容姿から同郷の人間だつと察せられたのだろう。だから同じ部屋に案内しても、間違つてはいなかつたかもしだい。

けれど最も大きな間違いが御座いました……それは俺が男の子だったのです！ 決して男の娘では無いよ、男の子だよ。見た目は兎も角、精神は真つ当な男だから。

てな事がつて、俺たちは別々の部屋に案内して貰つた。

……別に惜しかつたなんて、考え方いないよ？

閑話休題

「……そつか」

「はい。それでは失礼致します」

俺に頭を下げるとい、セイナーレは部屋から立ち去った。そう云え
ば俺は、昨日の朝から何も食べていないのだった……。色々あります
きて忘れていたが、思い出すと腹が空腹を訴えだした。

クツ！ 鎮まれ……俺のお腹よ、鎮まりたまえ……。
つて、アシ○カがタタリガミを抑えるかの如く、物まねをしても
仕方が無いので、早く準備をしてから、向かう事にしよう。

俺はふと椅子が目に入り、その上に置いていた、俺が日本から持
ち込んだ鞄に眼を向けた。

此處の連中は、俺達から荷物を取り上げるような事はしなかった。
俺はふと椅子が目に入り、その上に置いていた、俺が日本から持
ち込んだ鞄に眼を向けた。
いきなり『隸属の魔術』をかけてくる様な連中なのに、甘いと思
う部分が多く有った。

立ち上がり鞄の中身を確認した。

教科書、ノート、筆記用具（ボールペン×2、シャープペン×3、
消しゴム、蛍光ペン黄＆赤、黒マジック）、ハンカチ、ティッシュ、
携帯電話、手動充電器（LEDライト付き）、MP3プレーヤー、
ペットボトル、飴10個、ガム4枚。

その他の持ち物には、腕時計と財布に制服位か……。

この文明レベルはまだわからないが、まともな照明器具が存在

してない事を考へると、俺の持つてゐる物は、かなり武器になるかもしねりない。

……しかし鞄にお菓子とか入つてゐし、何しに学校に行つてたんだろうな。

ふと氣になり、俺は時計の時間を確認してみた。

AM 06:30

窓の外を見てみたが、見た感じだけど、時計に表示されてゐる時間と大差ないようだつた。

異世界の筈なのに、太陽が二つもあるのに、日照時間が地球と大差無いのが、不思議でしようがなかつたが、それは今考えても仕方が無いので、頭の隅に追いやつた。

鞄の中身を仕舞い直すと、元の場所に置きなおした。

現状着替えとかも持つていないので、このまま出て行くことにした。

風呂にも入つていないので、体臭が少し気にはなつたが、諦める事にした。

俺は扉に手を掛け部屋を後にすると、通路に居た侍女に声を掛けた。

「……すまんが、食堂まで案内して貰えるだろうか?」

俺の呼びかけに氣付き、侍女の娘は振り向き俺を目視すると、驚いた顔をした。

ショートヘアの活潑そうな、綺麗よりは可愛いと表現する様な少女だった。

「この世界は、容姿のレベルが高いのだろうか？

それとも単純に、雇っている人間がそう選んでいるのだろうか？

……後者の方が可能性が高そうだな。

「　は、はい！　かしこまりましたや！　ゆひしゃしゃみや！」

……おーおい、噛んでる噛んでる。侍女の少女はもの凄くテンパつていた。

セイナーレはこの侍女に、話を通していたのではなかつたのか…。

まあいいか、案内してくれるって言つのなら、なんでもいいさ。

「で、ではひびひになります。私に付いて来てください」

立ち直したと呟つたら、結局また噛んだ。面白い子だなんて、チヨツト失礼な事も考えながらも、俺は彼女に食堂まで案内してもらつた。

第一話 ……俺は戦いに向いてません

とうあえず、今わかつていることを話そひと申す。

まず、俺達を今すぐ一般市民に、勇者として公表する心算は無いようだ。

そして、このブレクスタ城に居る人間でも、俺達の事を知っている人間は限られていた。

この国の王族や宰相など上役の人間、そして一部の兵士や侍女達、これには、俺達の世話役という意味合いも、含まれているのであるう。

だから俺達は現在、城の中でも奥の方に（詳しい城の内部構造はわからないが）、隔離されている状態である。

それは元々、そう云つ予定だったのか、もしくは、召喚されたばかりの俺達が、勇者とは呼ばれては居るが、どう見たって一人とも強そうには見えない。

故に俺達が戦えるか如何かを、これは見極める期間なんだらう。

勇者として大々的に公表して、実は大した事在りませんでした。
……何て事があつては、国の威信に関わつてしまつ。

しかし、今の俺達には好都合だつた。

勇者として顔が売れてしまつた後では、動きにくくなつてしまつ。今の中に、逃げる為にも情報収集や、自分の力をつけておく必要がある。

そして、なにより分かった事がある。

……俺は戦いに向いてません。

「 ウヒヤツ！」

俺は体を格好も気にせず、木剣の横薙ぎを必死でしゃがみかわした。

今の俺は、訓練と称された苛めの真つ最中なのだ。
見つとも無くとも、斬撃をかわすので精一杯だった。
木剣とはいえ、当たれば骨折は免れないだろう。何より痛いのが嫌だもん。

勇者召喚での補正……と言つても、俺の場合は日本に居た頃より、若干身体能力が上がった程度だ。
ぶつちやけ今の俺の身体能力は、日本で同じ位の奴を探しても、結構見つかるかも知れない。

そんな俺が、まともに戦つて勝てるわけが無いだろう。

俺の相手は、ここ『神光国家ブレクスター』に所属する、『ランカ

スタ騎士団』の副団長様だ。

俺には、力、技術、経験、優雅さ、そして何よりも速さが足りない！

……いやさ、戦闘経験がまともに無い相手なんだから、手加減してくれてもいいだろ。

俺には嘗て、武道の経験があるなんて、裏設定などございませんよ。

「勇者たるもののが、その様にみつともなくかわしてどうするー。」

「いやいやいや、無理無理無理」

そりゃあ傍から見たら、見つとも無いし、格好悪いだろ。だが！ 痛いのに比べたら遙かにまつしから！だから、そんな事を俺は気にしない！？

「 ハツ！」

左上から右下に袈裟懸けに斬りかかれ、俺は無我夢中で木剣で受け止めた。

しかし受け止めた所を、素早く切り返され薙ぎ払われた。

俺は対処しきれず、持っていた木剣を弾き飛ばされ、木剣を咽元に突きつけられた。

「 ま、参った」

「 勇者と訊いて、どんな者かと期待していたのだが、この程度か？」

「 ……」

俺を侮蔑の眼差しで見下げられた。

周囲で見ている人間達も、侮蔑、嘲笑、呆れ、等様々だった。好意的な視線なぞ全く無かつた。

まあいいさ、弱いつて云うのは事実だし。俺自身怪我も無いのだから。

そうつ！ 痛いの、だいつ嫌いだし。

「遙くん！ 大丈夫ですか？」

雪緒は心配して俺に駆け寄つて來た。

「ああ……怪我とかは無いから大丈夫」

「そうですか……良かつた」

俺の返事に安心したのか、ホッとした表情をしていた。
そしてキッと俺の相手をしていた、副団長を睨み付けた。

……良い娘だな、雪緒は。

「……あれが、騎士の言つ科白ですか。」

「次の相手は貴女ですよ」

「はい。わかりました……遙くん、仇はとりますから

雪緒は俺にボソッと呟くと、俺が弾き飛ばされた木剣を拾い上げ、正眼に構えた。

俺と違い、様に成つているのを見るに、雪緒は剣道か何かの経験

者なのだろうか？

「なるほど、貴女だつたら少しは楽しめそうだ……では、行くぞー。」

「はい。いつでも構いません」

副団長は、雪緒の返答を訊くと。駆け出し一気に木剣を振り下ろした。

しかし、雪緒は難無く斬撃をかわしたのだった。

「なつー！？」

副団長は驚いていた。それだけ渾身の一撃だったのだ
らひ。

周囲で見ていた人も、さつきの一撃で終わるものだと、思っていたみたいで、口を開けたまま呆けている人も居た。

「貴方の攻撃は、遙くんとのやり取りを見させて頂き、憶えました
から」

「何を莫迦な事を！」

副団長は直ぐに立て直して、体を捻りながら横に難いだ。
雪緒はそれも難無く、バックステップでかわしたのだ。

「無駄です。貴方の攻撃では、あたしには届きません」

その後も悉く、雪緒は副団長の攻撃をかわし続けていた。
かわし続けているだけで、全く反撃もしないのだ。只ひたすら見
切りかわしている。

自分の攻撃が全く掠りもし無い事に、何より手加減されている事に、副団長は次第に、顔を真っ赤にしながらは殺氣奔り始めた。

「 クソッ！」

頭に血が上っているのか、自棄糞なのか真っ直ぐ刺突をかました。だが雪緒はその行動を読んでいたかの如く、寧ろ単調だったのであらうか、木剣を絡ませ、切り上げ、弾き飛ばした。

「どうです、まだやりますか？」

「クッ……いや、参った」

「そうですか、副団長様と言つても、たいした事無いのですね」

「 グッ！」

さつきの意趣返しだらうか、雪緒に言われ副団長は、顔を真っ赤にしながらも押し黙つた。

俺が全く相手にならなかつた相手に、雪緒は問題無く、いや相手にならないほど、圧勝したのだ。

周囲からは雪緒には羨望、尊敬など好意的な視線が集められていた。

俺とは違う反応……良いけど、良いんだけど……。

「 面白い、私もやらせて貰つても構わないかな？」

俺達の背後から声がかかり。振り返つて見るとそこには、騎士団長様が居られるとな。

「セヒの君、私も相手をして貰つてもよいか?」

「……わたしですか?」

「ああ、そうだ」

雪緒は少し逡巡してはいたが、返答した。

「はい、構いません」

「そつか、有り難う」

雪緒と騎士団長は、訓練場の真ん中に立ち構えた。

「では、参ります」

「ああ

お互に答え合わせると、勝負は一瞬にして決まった。

雪緒は体がブレ始め一瞬にして消えた。雪緒の特性—《高速移動》^{アビリティ}が発動したのだ。

騎士団長は反応する事すら儘ならず、田の前に木剣を突きつけられていたのだった

「なるほど、わたしたちが異世界に呼ばれた理由が良く分りました。これでは確かに縋るしかないですね」

雪緒の科白はとても辛辣だった。怒つてもいるのだらうか。

さつきは周囲の好意的だった視線も、科白を訊き敵意を持った視線へと変わっていた。

ただ、何も言つてこないのは、何も言えないのは、雪緒の強さを田の辺たりにして、恐れているからだろう。

「遙くん、もうここに居ても仕方がありません。お部屋に戻りましょう」

「あ……ああ」

「では、わたしたちは失礼致します」

雪緒はさつ周囲に叫びると、一瞥もせずに訓練場から立ち去ったのだ。

……雪緒さんちょっと怖いです。

俺は怒らせなこよつこしないと、心に決めた……。

第二話 1) めんなさい！ 聞いてこませんでした！

訓練でもわかつた事だが、身体能力が雪緒と俺とではかなり違つた。

具体的に言ひと、100m走るのに俺だと1~1秒かかるが、雪緒だと3秒かからない。

さらに言えば《高速移動》を使用したら、一秒もかからなくなつた。

同じ召喚者なのに、100mまで違うのかと暫く落ち込んだが、ビリしよつもないから。

……諦めた！ そり、無い物は考へない！ 後ろ向きの前向きに考えてこいつ！

できる事から考へていく方が建設的だらうから。

……とこつわけで、俺達は今、魔術の講義の真っ最中でした。

「…………」
「…………」

……「ごめんなさい！ 聞いていませんでした！ テヘッ。何て言える筈も無く、無言の肯定。

雪緒の方を横田で伺つて見ると、俺と違い真面目に訊いていた様だ。

いやだつても、長々と魔術の歴史を語られても、興味なんか無い

んだもん。

それよりは、魔術の使い方を早く教えて欲しいんだが。

「つまり、魔術とは神々や精霊に力をお借りした物なのです。故に、祝福を受けた神や精霊の力だけしか使用が出来ません。さらに、祝福を受けられることは、一人一柱だけと成ります。そして魔術における詠唱とは、力を借りる為の簡易儀式にあたります」

条件が多いな。

「……つまりは魔術師一人に付き一種類、もしくは一属性しか使用できなって事？」

「はいその通りです。魔術師にとって祝福を受ける相手は、今後の人生を左右するものです。
そして必ずしも、望んだ方の祝福を受ければとも限りません」

なるほど 魔術って云うのは借り物って事か。

神などと契約して、契約した人間にだけ力を貸すって事ですか。

「稀に産まれた時点で祝福を受けた方も下りますが、基本は祝福を受けないと、魔術を使用することは叶いません」

「では、あたし達も祝福を受けるんでしょうか？」

「いえ、例外も存在します。まずは魔方陣を使用されました物です。魔方陣には一種類の効果しか、意味を持たせる事しか出来ませんが、祝福を受けずとも使用が可能となります。

ただそれでも、魔術師以外には行使は不可能ですが……。

そしてもう一つの例外が勇者様方なのです

「……どういふ事ですか？」

「はい。勇者様方は、異世界でお産まれになられた存在では御座いません。

ですので存在の立ち位置が、神々や精霊等の存在に近しいのです。なので祝福も受けずとも、魔術行使する事が可能な筈だと思います」

ふむ 勇者の次は神様ねえ？

「だつたら自分の力を現象として具現化するのが、勇者にとっての魔術なのか？」

「いいえ、違います。近しい存在だと云いましたが、それ故に祝福を受けずとも、その他の神々や精霊から、力を借りる事が可能となるのです。

しかし勇者様でも、全ての方から力を借りができる訳でもあります」

たしかにこここの世界の人間から見たら、勇者って云うのは十分チートだが、それでもそこまでは便利ではないのか。

「そして魔術行使する上で必ず、魔力が必要となります。神々等に力を借りるので。その際に魔力を媒体として捧げます。

祝福を受けます以前の問題として、魔力を持たない人は、魔術を行使することが不可能です。またお借りする力が強ければ強いほど、必要となる魔力も多くなり、更に詠唱時間も膨大と化していきます

なるほど、MPを持たない人間は、最初から魔術なんか使えないって事か。

ゲームの戦士や武道家が魔法を使えないみたいなもんかな。

しかし話を訊くだけだが、とても戦闘に活用できそうも無さそうなんだが。

「そして大気中には魔力マナも存在しますが、これに関しましては、普通には見る事も、感じる事も出来ません。

ですので魔方陣や魔道具など、魔力を扱う為には外部媒体を必要とします。

そしてそれを発動する為の切っ掛けとしても、魔力オドが必要となるのです。

故に魔術師以外には、魔術を扱う事は叶いません

本当に条件が多くすぎるだろ。にしても文明レベルも元の世界には遠く及ばないし、魔術すら、自由に扱えないのだとしたら、不便な世界だな。

「なあ、魔術師ってのは、この国だけでも何人くらい居るんだ？」

「城に所属されます人間だけで、約30人程となつております。この国全体で見ても、大体100人居るかどうかだと思います」

MPが必要で更に祝福を受けなければ、使う事が出来ない。条件が厳しい癖に、そこまで便利つて訳では無いのだったら、その位居れば上出来か。

「私が祝福を受けておりますのは、『炎神ファルネイア』と云いま

す。

炎神の名の通り、私の魔術は火を操る物になります。

そして、この神は火属性を操る者にとっては、最もポピュラーな神なのです。

ですので恐らく勇者様方も、扱えると思いますので、今から魔術を実際に使ってみますので、真似をしてみて下さい

おお！いよいよか……ヤバイ！ ワクワクしてきたぜ！ なんせ魔術だぜ、魔術。幼い頃にかめ〇め波と一緒に、一度は誰だつて真似をした事があるもんだよな。

それが実際に使えるって、浪漫溢れるよな。

「うちに飛ばされた時に、『隸属の魔術』をかけられたけど、あんなもの邪道だよ邪道、魔術って云うのならやつぱり、炎か風だよな。

講師役の魔術師が、右手をスッと差し出すと、俺は掌に魔力オーラが集まるのを感じた。

そして何かを喋っている、恐らく先程説明していた詠唱だらう。

「炎よ、火球となりて吾が手に集え『ファイアボール』」

ボウツ！

……ピンポン玉程の大きさの火の玉が浮かんでいた。

……ええっ！ ちょっと……ショボッ！ 俺の浪漫を返してくれ！ つてまあ、さつき言っていた、詠唱時間や魔力量の都合なんだろ

うな。

「では同じよひ試してみて下せ」

「ああ」「はい」

俺と雪緒は返答すると、真似をする様に右手を前に差し出した。

ええっと、それからどうだつたつけ？ 右手に魔力を集めていたよな？

思い出しながら俺は右手に集中し、魔力を集めだした。

前に『魔術感知』をやつて以来、魔力を感じ取るのは、さほど苦にならなかつたので簡単に出来た。

後は詠唱だつたな……先程言つていた科白を思い出し、炎を想像しながら、唱えてみた。

「炎よ、火球となりて吾が手に集え『ファイアボール』」

ボウツ！！

俺の掌に火の玉が現れた……つて、うわあ、俺もこんなもんか……。

ちょっと期待していただけに、あまり変わらなかつた事実にガッカリしていると、講師役の魔術師が、驚いた表情を浮かべていた。

「そ……それは、蒼炎では……」

んん？ 蒼炎？ 何それ？ と思いながら、再度俺の火の玉を確認すると、先程の魔術師が出した火の玉より、蒼かつた……といふか真つ蒼だった。

「なんだ、これ？」

俺は不思議に思い、魔術師に尋ねてみた。

「それは蒼炎と言いまして、『炎神ファルネイア』からお借りできる。

最強の炎と呼ばれております。私も実際に田にすることは初めてなんですが……」

「……へえ」

魔術師の反応を見るに、かなり凄い事なのだろう。

俺には良く判らなかつたが、寧ろもつとド派手なヤツを出したかつたんだが。

けれどとりあえず、俺は魔術が祝福を受けずとも、問題無く使える事がわかつた。

雪緒を窺つてみると、問題無く赤い火の玉を手に浮かべていた。確かに召喚者ってのは、祝福を受けなくとも、魔術が使えるみたいだ。

しかし雪緒は弱点が無いな、接近戦も出来て魔術も使えるつて、ちょっと反則過ぎるだろつ。

「ちょっと訊きたいんだが、身体能力を強化する魔術つて存在するのか？」

「恐らく……ですが、私は見たこと無いのですけど」

在るかも知れないって、わかつただけで十分だ、とてもでは無いが、今の俺では戦力にならないだろうから、もつと勉強しなくては。

せめて彼女の足手纏いに、ならない位にはならないとな。

第四話 誰か俺を慰めて！？

あれから俺は一人部屋で魔術の自主練に励んだ。

と言つても流石に、自分の寝室で攻性魔法の練習をする、勇気は無かつたので、主に身体強化等の魔術に、チャレンジしてみた。講師役の魔術師は存在はするかも知れないとか、言つてはいたので、実際に試してみたんだが、結果は大成功だつた。

本来魔術を使う為には、祝福を受けた上で、魔力を捧げつつ詠唱が必要とされでは入るが、俺は祝福は必要ない上に、特性『無詠唱アビリティ』のお蔭で、詠唱が必要なく、魔術をイメージして、魔力を捧げるだけで使えたのだ。

何より『魔術感知』の恩恵で、魔力の認識が出来るのだ、故に俺にとつては魔術制御が、もの凄く簡単だつた。

試してわかつたが、魔力が眼に見えるつて云うのは、本来出来ないような、細かい操作も出来るのだ。

結果、今まで無かつた魔術も使えるように成つていった。

具体的に言えば『浮遊移動』で、空中に浮く事が（浮いて移動するだけで、空を飛ぶとは程遠い）出来る様になつたり、『光学迷彩』で文字通り、透明になつて、女風呂を覗きに行こうとしたり……。行こうとしただけで、実際には行つてないからね。俺の中の天使と悪魔が、バトってたのは、ここだけの秘密だ。

漫画やゲームで出てきた様なものを、色々試してはみたが、何だかんだで殆どが成功した。

しかし、プレートを見てわかつてはいた事だが、俺は魔術に関しては、際限無く反則だった。

全てが全てを試した訳では無いのだが、大概な事は出来るのだろう。

この城の魔術師にコンタクトを取り、さり気なく訊いてみたのだが、その様な魔術 자체が存在せず、俺のオリジナルの魔術だったのだ。

この世界の人間は、前提条件として祝福を必要としているので、同じ事が出来る存在は居らず、勇者である雪緒に訊いて色々試してみてもらつたが、俺と同じ様に使う事は出来なかつた。

魔術は神たちの借り物の筈なのに、俺の力はその枠を超えているのだが、

いくら考へても詮無い事なので、無駄な考へはしない事にした。

そう、寧ろ俺が神様だ！？ あ……いや……ごめんなさい、調子に乗りました。

俺は、自分に強化魔術が使える事で、もしさと想いチャレンジしたら、こんな物が誕生した。

「つおおおおおおおおおお、○次元ポケットだああああー。」

俺がこの世界に持ち込んだ鞄の中に、亜空間ワームホールを繋げてみました。はい、そうです。かの有名なネコ型ロボットの、○次元ポケットを試してみたら、成功したのだ。

自分を強化出来るのなら、物にも出来るかと思つたら、案外簡単
に出来たのです。

作るうと思えば、何処でもドアも作れるかも知れないな……。

しかし、この異世界に来てから数日経つが、そろそろ城から抜け
出して、情報収集を始めるべきだろうか……。城の中でもやろうと思
えば出来なくは無いが、城の外の状況を把握しておかないと、動き
辛い部分も出るかも知れない。

当たり前だがこの国の連中は、俺が『隸属の魔術』がかかるつい
ると思っていても、現状秘匿されている人間が、このまますんなり
外に出れる訳が無いだろう。

という訳で早速俺は、自分自身に『光学迷彩』^{インヒビシブル}をかけた。
この魔術に関して言えば、特性『魔術感知』を持つ俺以外には、
認識する事は出来ないみたいだった。

訊いただけだが、只でさえ魔術師と言う存在が少なく、尚の事、
俺みたいな特性を持つ人間は居ないのだろう。
などと云う事があり、俺は安心して城から外に出れるのだ。

しかし、いざれは何処でもドアを作り、そこから出入り出来る様
にしたいな……。

ところ訳で、やつて来ました城下街です。

とりあえず、今回は初めて外に出るつて事で、雪緒には、お留守番をお願いしといた。

勇者がいきなり一人とも居なくなれば、怪しく思われるだらうし、何より、彼女の『隸属の魔術』が解けていないので、安全の為にも、残つてもらつたのだ。 いずれは、外に出せる様にはしたいが。

まあ、この問題は今考えても仕方が無いので、置いておく事にして。

早速だけど、街で情報収集を始めるとするか。

……しかしまあ、薄々感じてはいたのだが、この国はかなり大きいみたいだった。

街の外れには防壁があるんだが、裸眼では遠すぎて視認できなかつた。

これでも裸眼1・5（召喚者補正で若干上がり2・0）だつたんだが、それでも見えなかつたのだ。

恐らくだが、半径で見積もつても一キロ以上あるのだろうか。

こんな所で、おのぼりさんをしていても仕様が無いので、通りに市が立つていたので、見て回る事にした。

市が立つている場所は、人が溢れてとても賑わつており、人だかりがある、店も何店があつた。

売つている物は、食料品から衣料品、雑貨に果ては武具など様々で、予想通りは予想通りだつたが、実際に見てみたら圧巻であつた。

わかつてはいた事だが、自分が異世界に居る事を、思い知らしめる光景なのだ。

俺は気を取り直して、近くにあつた食料品を扱つてる店を覗いて見た。

見た事がある物や、見た事の無いもの、様々な野菜や果実が並んでいた。

見た事があると言つても、元の日本で見た事があるつて訳では無く、城の中で食事の時に出てきた物なんだが。

値段も様々で、林檎みたいだが青い果実に、30シンと付いていたり、キャベツみたいな物には40シンとなつていた。

このシンってヤツが、この国での通貨単位なのだろうか？

1シンが日本円で、幾らに当たるかは判らないが、憶えておく事にした。

店主のおっさんが俺に気が付いたのか、声を掛けてきた。

「お？ 姉ちゃん、なんかお探し？」

…………ね……姉ちゃんって俺の事ですか？ 周囲を見渡しても、それらしい人が居ないので、あまり考えたくは無いが、俺の事だろう。

しかしこんな所で、一々言い返しても仕方が無いので、あえて女の振りをする事にした。

「ええ、ここに来たのは初めてんですけど、いま手持ちが心許なくて、あの……よろしければ、物を売る事の出来ますお店を、私に教えて貰えないでしょうか？」

「うむ……自分でやっておきながら、気持ち悪さで吐きそうにな

つたぜ。

「ほお、それは大変だつたな……わかつた、この先にある道具屋に、
ガイルって言うヤツがいる。そいつにテレクの紹介だつて言えば、
悪い様にはして来ないだろ?」

「おおー、ものは試しとやつてみるもんだな。

おつさんは見事に、俺に騙されて女だと思つたのだらう、鼻の下を
伸ばしながら、俺の問いに答えてくれた。

「そりなんですか! ? ありがとうございます!」

……ちょっと身がゾッとしたが、この際目を瞑る事にした。
俺は店から離れると、早速おつさんに紹介された、道具屋に向かつた。

市を横切つて進んで行くと、先程紹介された道具屋らしき店を見
つけ、中に入つて行つた。

店の中には魔物の腕らしき物や毛皮、または青銅の鏡など、様々
な物が商品として、所狭しと陳列されていた。

「はい、何をお求めでしょうか?」

店の奥から、店主らしき人が顔を出し、俺に声を掛けってきた。
コイツがどうだらうか?

「あの……」にガイルさんつて居られるでしょうか?」

「」でも俺は、女の振りをする事にした、効果は先程実証されて
いるので、恐らくここでも有効かもしない……。

ただ最大の欠点としては、俺の自尊心が、ガリガリ削られてしまう事だらけ。

「ああ 誰か俺を慰めて！？」

「うん？ ガイルは俺だが？」

「あ…… そだつたんですか、失礼しました。私は『デレクさんに、紹介されて来たのですが』

「んん？ 『デレクにか？ デレクにか？』用件かな」

「はい、物をお売りしたいのですが、『デレクさんには、ここに来れば良いと、教えていただいたのですが』

「ああ…… 売りね。それでどんな物を売つて貰えるのかな？」

俺は、今まで肩に提げていた鞄を取り出した。そり、これは、例の○次元鞄である。中には、この世界に持ち込んだ荷物を入れてある。

中から黒マジックを取り出した。日本でも最も有名である「マジック」です。

「あの…… れなんですけど……」

気弱な振りをしながら、差し出した。

「なんだいこれ？」

店主は訝しがりながら、俺の手に持っているマップ〇一を見めた。

「はい、これは文字を書く道具でして……」

俺はお手本としてキヤップを外し、掌に文字を書いてみた。

この世界では当たり前だが、ボールペンやシャーペン等は存在しなかつた。

尚の事、〇ツキーなど存在せず。

万年筆とインクを使い、紙も木の纖維で出来た物は無く、羊皮紙などである。

それを考慮すれば、俺の持っている文房具は、それなりの値段で売れるのではと、考えたのだが……。

「まつ……どう仕組みになっているんだい？」

「私も詳しくは……ただ中にインクを溜めておく仕様だったと」

ぶつちやつけ、詳しく説明しようと思えば出来なくは無いが、売る前にバラしても、こちらにない事など無いのだろうから、濁して表現にしておく事にした。

「ふむ そうだな、デレクの紹介と言つ事だし、3000シンでどうだい？」

3000シンか……貨幣価値がわからないから、判断がし辛い。とにかくに、参考になる物は無いかなと、周囲を見渡してみたら、ありました……訓練で度々お世話になっております。……そう薬草

だつた。

「…………これは」

俺は薬草うしき物を指さし、訊いてみた。

「ん?……薬草がどうかしたのかい?」

ふつ やつぱつ薬草で合つていたみたいだ。

「これひつお幾らなんですか?」

「薬草が欲しいのかい? 一〇〇〇シンになるかど

よつじや! 情報ゲット! 薬草一個が100シンだとすれば、日本円で言えば千円位か? 幾らなんでも、消耗品が一万円って事は無いだろ、だとすれば一シンが十円位で、3000シンだと3万円位だろ? うか? ……?

まあいい、今は一文無し何だから、ある程度は勉強だと割り切つておく事にした。「いえ、少し気になりましたもので……あと、そのお値段でお願いします」

「ね……やつかい? まごどあつ」

俺の問いには、たゞぐくにはならなかつたみたいで、店主は店の奥に戻り、代金を取り出すと、すんなり俺に渡して來た。

「せひよ、3000シン」

「あ……え? も」

俺は30枚の銀貨を受け取った。銀貨が30枚って事は、これ銀貨一枚が100シンって事だろ？

「お尋ねしたいんですけど、いかいのお店には、魔道具って置いてありますか？」

店主は俺の質問に、少々驚きながらも答えてくれた。

「おや？ 魔道具をお探しだったのかい、残念だけど店では扱っていない。知ってるかも知れないけど、魔道具ってのはもの凄く稀少で、この国でも、取り扱ってる店は無いかも知れないな……。あと失礼ながら、先程売った3000シンでは、とてもでは無いけど、最もランクが低い物でも買えないと思つよ」

「え…… そりなんですか？」

「うん、そうだね、最も低いランクの物でも1000000シンは必要だね」

ひゃ、ひゃくまんなん！？ に、日本円に直すと一千万円かよ……。

しかも最も安い物がだと…… ともではないが、手が出る物では無いな。

魔道具で、俺の戦力底上げを考えていたんだが仕方が無い、何処か武器が手に入る場所を、訊いてみる事にするか。

「でしたら、どこが武器屋さんを教えて頂けないでしょうか？」

「武器かい？ うーん、そうだね、だったらこの通りを真っ直ぐ行つた所に、大きくは無いが、品揃えだけは良い所があるから、そこ

「行つて」りん

「あ……本当ですか？ ありがとうございます」

「構わない」

俺が丁寧にお辞儀をし、お礼を言つと店主は少々テレた顔をしていた。

……案の定、俺の演技に騙されていたみたいでした。フツ……他愛も無い。

だがしかーし！ 俺の自尊心にも、多大なダメージを受けてしまつた！

嗚呼……無常……。

「こりつしゃいー。」

道具屋の店主に教えて貰つた武器屋に入ると、一十歳半ば位のお姉さんに迎えられた。

「なにをお探しかな？」

「ええ……」

俺は曖昧な返事をして、店内を見回した。店舗としてまさして大きくなかったが、所狭しと、いやギュウギュウに様々な武器が置かれていた。

……確かに品揃えだけは良い様だ。

「あの、お……いえ、私でも使えるような武器って無いでしょうか？」

俺つて言いつになつた、危ない所だつたぜ。

つて、あ……相手がお姉さんなり、この作戦意味無いじゃないか！？

しかし今更、言い直せる訳も無く、このまま通すしかないのか……。

「うん、そうだねー、手を見せて貰つてもいいかな？」

「手……ですか？」

「うん、うう、手をね」

俺はお姉さんに言われた通り、手を差し出した。お姉さんは出された手を調べていぐ、手のひらを触ったあと、確認するみたいに腕も触つていった。

「うーん、そうだなー、筋力がそこまで高くないと思つから、なるべく軽い物がいいんだろうなー。
やつぱり剣がいいのかな？」

「いえ、特にはじだわりは無いのですけど……

「やつかー、だったらこれぐらいこかな」

お姉さんは奥からナイフとフレイルを持って出てきた。

「（）數量の中で、貴女に合ひそつなのはこんな感じかな、見たところ初心者さんみたいだし、値段もこの位がいいと思うな」

「あれ？ 私言いましたつけ？」

「つうん、これでもそれなりにやつて来ているからね、手だつて綺麗な物だし、経験者に比べたらつてことだけど、あーそうだ、予算も教えてもらえるかな？」

その範囲でまだ、いい物があるかもしれない」

予算か……今後のことを考えると、ある程度手持ちを残しておいた方が良いか、だとすれば、2000シン位にしておけば良いか。

「ええっと、2000シン位を考えていたんですけど……」

「2000シン？ そうなんだ……3000シン程あれば、特性武器が出せたんだけどなー」

「特性武器？ なんですかそれ」

「んー、特性武器って言つのはね、魔術師じゃなくても、それに近い力が使えるつてシロモノだよ。今回で言えば火だねー、と言つても焚き火程の火力も出ないんだけど」

「んん？ 特性武器って云つか属性武器ですな。しかし魔道具とどう違つうんだ？」

自分で考えただけでは詮無いので、訊く事にした。

「それって、魔道具とどう違つうんですか？」

「魔道具つて！？」そりゃあ天と地ほど違うよ。まず魔道具は、魔

術師にしか使えないけど、特性武器は誰だって使える事。

そして何より威力が違すぎるよ。特性武器では、どんなに良い物でも、火を熾す程度にしか使えないから」

劣化版の魔剣みたいなもんか、まあ、特性武器は、日本円で三万位で買えるのに、魔道具は最低でも一千万以上するってだけでも、かなりの差があるんだろうな。

「そうなんですか？……やっぱり、そちらのナイフ頂けますでしょうか」

反則に近い魔術が使える俺が、欲しがる様なシロモノでは無いので、普通のナイフを購入する事にした。

「そお？　まいどありがと」

俺は代金として1500シン支払った。……一万五千円のナイフか……。

日本で考えれば、かなり良心的シロモノになるだろうな。

「はい、おつり。それとこれは、初心者さんにサービスしといったから

お姉さんは、バンド付きのケースに入ったナイフを渡して來た。
このケースがサービスって事だろう。

「あ、ありがとうございます」

「いいのよ。それよりも今後も店うちを利用してね

俺は購入したナイフを鞄に仕舞うと、お礼を言つて店を出て行つた。

暫く通りを歩いていると、冒険者ギルドと看板を立てている、建物を見つけた。

「 そういえば、自分の能力を見るためのプレートは、ギルドで使われている物だつて、言つていたよな……。 」

俺は不意に、侍女長の科白を思い出し、興味本意で覗いて行く事にした。

中に入ると視線が俺に集まつて来た。少々気にはなつたが、それがあえて、気が付いていない様な振りをして、受付カウンターに向かつた。

暫くすると興味を失つたのか、俺に向けられていた視線が、殆ど無くなつていた。

「 冒険者ギルドへようこそ。どういったご用件でしょう 」

受付のお姉さんは、俺に声を掛け一ツコリ微笑んだ。

「 聞きたいんだが、ギルドって云つのは、ここだけなのか？」

「 およ？ ここに来るのは初めてかな？ では説明いたしましょう。 」

この国には複数のギルドが存在して、ここ冒険者ギルドは、主に冒険者に討伐や探索依頼など、仕事を受注したりする場所で、他には商人ギルド、巡礼者ギルド、鍛冶師ギルド等あるんだけど、他に聞いて云えば、実際見に行つて貰つた方が、私が説明するよりは、わかりやすいかも知れないな。 」

受付のお姉さんはノリノリで、俺の質問に答えてくれた。
ふむ ギルドは一つではないのか……。

「そのギルドって掛け持ちも出来るのか？」

「ああ、そこ言い忘れていたね。ギルドって言つのは、基本的に一つしか加入が出来ないの。だから、加入条件としては、他のギルドに加入していない事なんだよ。

もし他のギルドに加入したくなつても、まず前のギルドを止めた上で、三ヶ月以上経過していないと、加入出来ないんだよ」

なるほど 意外と縛りが多いな……今日は情報収集目的で來たので、今すぐ判断するのは早計だらう……という事で、今回は加入を見合わせた方が良いか。

「そうか ありがとう、ちょっとと考えさせてもらひよ

「そお？ うん、ゆつくり考えればいいよ

俺は受付のお姉さんにお礼を言つと、冒険者ギルドを後にした。今日はもう城に戻るとするか……今回が初めての城外だし、長時間不在にする事もマズイだろうから。

酒場について情報収集もしたかつたが、次回に回すことじょう。

嗚呼然し、何処でもドアが欲しいな……。

第五話 ふうー、いい仕事をした。

初めてのお出かけから、帰つてくると、早速何処でもドア作りに取り掛かつた。

試行錯誤を繰り返しながら、結果 成功した！

「じゃじゃじゃじゃん！ 何処でもドア～」

大山ドラえのんの如く、お決まりの科白を言つてみた。
あ？ ……俺はどっちかと言えば大山派だから。
だからこの際、のぶえもんつて呼ぶことにしてよつ。

余りの嬉しさにテンションが有頂天だ。

イヤツホー！ しかしまあー、やれば出来るもんだな。
幼い頃もよく言われたもんだ、やれば出来る子だつて……あれ？
これは違つたっけ？

と言つても、本家程の万能性は無いのだけど。
具体的に言つと、流石に次元跳躍無理だから、俺が知つてゐる空
間同士を繋げると云うことと、その為一度行った事がある場所にし
か、行くことが出来ないと云つ縛りがあるんだが。

まあ本家程の万能性があるんだったら、元の世界に簡単に帰
れるんだろうしな。

しかし、このピンク色のフォルム、のぶえもんの秘密道具の中で、
欲しいものベスト3に入るだろう、俺は達成感に溢れていた。

「ふうー、いい仕事をした」

かいてもいない額の汗を拭う様にしながら、ドアを眺めてこると、
背後から扉を叩く音がした。

「遙くん、いますか？」

この世界で、俺の名前を呼ぶのは一人しか居ないので、誰が来たのかは直ぐにわかった。

「ああー、いるよ、開いているから入つておいでの

俺の声が聞こえたのか、雪緒が入ってきた。
そして俺の前にある物に気が付いて……呆気にとられて固まつた。

「は、遙くん……それなにかな？」

ああ、やうじえば、雪緒にこれを見せたのは初めてだつたな。

「んー、何処でもドアだよ

「……はい？」

「だから、何処でもドアだよ、何処でもドア……雪緒は知らない？」

「いえ……知っていますよ。ただ私の知っている物は、青い猫さんの持ち物だったような……」

「うん、雪緒が言つている物で、間違い無いと思つよ。ただこれは俺が自作した物なんだけどね」

「……遙くんの魔術は、色々出来るとほ恂つきましたけど、こんな

「」とも出来たんですね

雪緒は俺の言葉に納得したのか、ドアをペタペタと触つて、確認していた。

「何処でもつて言つても、そこまで便利な物では無いんだけどね」

「そうなんですか？」

「うん、俺が作ったのは、一度行つて記憶した場所にしか、行く事が出来ないんだ。」

のぶえもんが使つてた物には程遠いけどね」

「そうですか……それでも、便利な物には変わりないですよ」

「そつか……うん、ありがと」

「　　い、いえ」

俺は作った物が褒められたので、お礼を言つと、雪緒は耳を赤くしながらも声を返した。

「……それで、のぶえもんてなんですか？」

あれー？ 今、そこをつっこむの？

「ええつと……大山ド○えもんだから、のぶえもん……」

いやああああああああ、お願いだからー。俺にそんな事を説明させないで、恥ずかしい……。

「あ……ああ、なるほど」

雪緒は俺の説明に納得いったのか、頻りに頷いていた。
俺は自分がわらつと言った科白に、果てなく後悔していた。
このままではいけないと思い、恥ずかしさを押し殺しながらも、
雪緒に訊ねた。

「それで、何か用事だったのかな?」

「いえ、特に用事があるわけでは……」

雪緒は何だかんだで、俺と一緒に行動する事が多かつた。
ここにいる誰よりも強いのだろうが、彼女の立場や容姿目的で、
擦り寄る者がおううが、雪緒にとつてはこの世界は孤独なのだろう。
この先についての恐怖もあるだろう。
その中で、同じ出身地、同じ境遇、そして同じ立場　彼女の唯一
の例外が、俺なんだろう……。

だから、時間があれば頻繁に俺の所に来ていた。

「……そつか」

「用事がなかつたらダメでしょつか……?」

雪緒は上目づかいで、俺を見詰めてきた　「おおおおおー　め
ちゃカワヒエー!　止めろ!　そんな目で見るな!　惚れてまつやう
ー!」

「こやこやーそんな事無いよ、そんな事無いー!」

「そうですか…… よかつた……」

俺は慌てて答えた、それを訊いて安心したのか、雪緒は深く息を吐いていた。

だからその一々可愛い行動を止めてくれ。

「あ！ だったら、俺が調べてわかつた事を教えようかと思う

「わかつたことですか？」

「うん、そう、わかつた事」

俺は魔術を駆使して、色々暗躍していたのだ。

具体的に言えば、書庫に潜入したり、騎士や兵士、侍女や魔術師共の会話を盗み聞きしたり。

またはこの国の有力貴族の情報収集等etc、そして女風呂にせんにゅ……あ、これは嘘ですよ？

書庫に潜入した際には、入り口に魔術で封印されていたけど、俺の魔術抵抗力持つてすれば、ドアノブを握つただけでぶつ壊れました。

もちろん俺が、魔術を掛けなおしましたけどね。俺以外は入れないよ。

この世界の常識のお蔭で、俺がそんな事出来るなんて知っているのは、雪緒以外居ないから、大丈夫だろ？……

書庫にあつた蔵書のお蔭で、色々わかつた。魔術の事や勇者についての事調べて、わかつたって言つか、わからなかつた事だが、俺の職業『愚者』や、俺の魔術については書かれていなかつた。

本当になんでしょ「う」俺？

ともかく、勇者についての事は、雪緒にも伝えた方が良いだ
んだ。

「リの世界に召喚された、過去の勇者について、ある程度わかった
から『アーマー』と連れて。」

「え？… 本物ですか！？」

「うさ……過去、一番新しいものでも、一千五百年以上前になるんだだけ
どね。

勇者が召喚されたらしく、リから召喚俺達と一緒にだね

「……はい」

「で、細かい事は翻覆させて貰つかば、その勇者は仲間と共に魔王
を封印したりしね」

「うまでも、よくあつぶれたお話をだよね。

「やのあと、勇者はどうなったんですか？」

「うさ、セイが気になるよね。その後、その勇者はリの世界で結
婚して、そのまま生涯を終えたらしい。
少なくとも、俺が見た書物に書かれている勇者は、全員リの世界で
死んだ事になつている」

「そんな… ジヤあやつぱつ……」

「「」の城の連中は、俺達を帰す心算が無いのだろう……。

いや、違うか、帰す心算が、では無く、帰す方法が無いのかも知れないな」「

「…………」

「少なくとも「」の事を、「」の国の連中は知っている。知った上で俺達を呼んだ……。

呼ぶ事は出来ても、帰れない一方通行……まるで、かごめかごめみたいだな」

俺は吐き捨てる様に言葉を紡いだ。

「……だったら、わたしたちはもう、帰ることが出来ないんですか？」

かぼそい声だった……。俺は息を深く吸い込み、雪緒に語るようになに訊かせた。

「いや、俺はまだ諦める心算はないよ。雪緒も知ってるけど俺の魔術は、この世界でも反則級チートなんだ。もしかしたら、何かしらの方法があるかもしれない」

嘘をついてしまった……。俺は帰れないんだろうなと、薄々感じていたのだが。

氣休めとはいえ、流石に雪緒に嘘を言つのは、良心がズキズキと痛む。

「そ……そうですね、まだ諦めることは早いですもんね」

雪緒は胸の前で、小さくガツツポースをとりながら言った。
俺はその可愛らしい行動に、癒されながらも答えた。

「ああ……そうだ。その為にも雪緒を解放して、この国から抜け出
そつ」

嗚呼、そつだ。この国の連中の為に、働いてなんかやるものか。
早く雪緒を解放する方法を見つけよう。

第六話 様式美つて大事だよね？

俺は、雪緒の魔術を解くため、城内、城外問わず情報収集をしていた。

何処でもドアが完成したので、外に出入りするのもかなり楽になつたし。

○次元鞆のお蔭で隠すのも然程苦ではないので、大変便利であった。

まつたくのぶえもんは凄いぜ！

そして、持ち込んだ筆記用具の類は、大半を売り捌いたら所持金が15000シンになりました。

凄いよな、日本では全部買つても千円いかないのに、こっちの世界では十倍以上になるんだから。

それでそろそろ、実戦を戦闘を経験するべきだろうと思い始めた。訓練自体は続けてはいるが、雪緒の前以外では基本的に力を隠しているので、殆ど訓練が訓練になつていなかつた。

最初の魔術講習の時に、誤つて蒼炎なんて使つてはしまつたが、それ以来俺は、それしか出来ない振りをしている。

雪緒に関して言えば、初めに怒つて本気を出してしまつたので、今更感があるので、普通に訓練に取り組んでいるのだが……。

故に俺は、この国の連中には大した事の無い、落ち零れの方の勇者と云う認識になつていてる。

まあそれは望んでやつた事なので、何の問題も無いのだけど……。

といつ訳で、冒険者ギルドに登録して、討伐クエストでも受けようかと思っている。

では、早速出よう。

「何処でもドア～」

例の科白を言い、鞄からドアを取り出した。

そこ！ サイズ的に取り出せるのは可笑しいとか言わない！
そこはファンタジーだって事で納得するべき所だから！

雪緒も連れて行けたら良かったのだが、例の魔術に、任意追跡効果があるらしいので、外に出せないので。

あつと、いう間に冒険者ギルドに到着しました。
所要時間にして五分もかかっていない。

便利だぜ！ 何処でもドア！

早速だけど登録に向かうか……。

「冒険者ギルドへよひつけ。どういった用件でしょうか？」

「登録をお願いしたいのだけど」

「はいはい、あ……君は！」

受付のお姉さんは、俺の顔を見て少し驚いていた。
気になり俺が訊ねてみると。

「君は前に来た子だよね？」

「この前来た時と同じお姉さんだつたのだ。」

あの時は、然程気にしてなかつたので、俺はうつかり顔を忘れて
いた。

気が付かなかつた事を誤魔化すよつて、受付のお姉さんに答えた。
「ええ、よく憶えてましたね。ここに来る人つて少なくないで
しょつ？」

「まあね、けど君みたいな綺麗な人つて滅多に来ないからね」

綺麗つて男にかける誉め言葉じやないぞ。

「そつかー、それでやつぱり登録する事にしたんだ」

「ええ、まあ」

「りょーかい。それで登録するんだけど、ギルドカードつて持つて
いるかな？」

俺は、鞄からセイナーレに貰つたプレートを、お姉さんに差し出
した。

「ギルドカードつて……」れでいいんでしたつけ？」

「うん、やつだよ。じゃあ預かるね」

やつぱりあのプレートはギルドカードだったのか。
受付のお姉さんにプレートを受け渡した。

「あと登録に1000シン掛かるんだけど、持ってる？」

1000シンか……そん位はやつぱりかかるのか。

俺が銀貨10枚を渡すと、お姉さんはギルドカードをヘンテコな
機械みたいな物に翳した。

すると機械が光だし、カードをスキャナみたいに読み出した。
俺は気になり、お姉さんに訊ねてみた。

「それってなんですか？」

「うん？ ジれ？」

お姉さんは可愛らしく首を傾げた。

「これはギルドカードに書き込んだり、読み込んだりする道具だよ。
例えば今は、君のカードにギルド情報を書き込んだりしてるのよ。
他に言えば、討伐や探索で何を何匹倒したとか、何階まで探索し
たとかわかつたり出来るの。

ただ、個人情報に関して言えば、本人の許可無く閲覧できないか
ら安心して」

なにその便利な万能カード。便利だとは思っていたがそこまでか！
それを聞き少し気になつたので訊ねた。

「じゃあギルドカードって高価な物なんじゃないんですか？」

「んー、量産はされているからそこまでは……再発行する場合は
2000シン入るんだけどね」

再発行でも日本円で二万かよ……物の価値が違いすぎて混乱して
くるな。

つてな事を話していると、機械が止まっていた。

「はい、登録は完了したから確認してみて」

俺はお姉さんから、ギルドカードを返してもうひとつ、確認した。

名前：雪村遙
AGE : 16
SEX : 男
LV : 1
JOB : 愚者
HP : 62
STR : 77
VIT : 52
MP : 1084
AGI : 81
DEX : 101
INT : 4712
RST : 9877
LUC : 555
称号：魔道具創造者特性：無詠唱、魔術感知、魔術操作、物質操作、
物理干涉、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効

装備：学園制服

祝福：なし

ギルド：冒険者ギルド ランクF

「おお！ 登録されているな。

「ってあれ？ 称号と特性が増えてるぞ？ ギルドに登録されたから……な訳ないか。

見たところ多分、俺が○次元鞄や何処でもドアを作った事で付いたのだろ？」

「じゃあ、改めて冒険者ギルドについて説明するね。

この冒険者ギルドでは主に依頼の仲介、例えば討伐や探索、採取等の依頼を受けているの。

他にも魔物を倒した時に獲られる、素材を買い取りしたりしているわ。

依頼に関して言えばボードに張つてあるから、その中から選んで受ける事になるの。

依頼によってランクがあつて、上はSから下はFまであるから。基本的には、ランクに合つた仕事しか請けることが出来ないの。君は今Fランクだから、受けれるのは一つ上のEまでよ。

ランクは受けた仕事の功績で上がっていくから頑張つて

「…………」

「他に何か、気になる」とつてあるかな？」

「今回初めてで、討伐系のいい仕事つてないかな？」

「討伐の仕事が受けたいの？」

「……ええ、まあ」

「わかった。チョットまってね」

「わつわつとお姉さんば、机の弓を出しを開け探りだした。

「討伐つて言つたが、どんなのがいいの？」

「ランクはE位で、なるべく城から離れない場所が良いんだけど……」

「うーん、そうね……あー、ちょうどいいのがあったわ！　これなんじどうね～。」

お姉さんはそつ言つと、俺に羊皮紙を差し出せした。

ええつと何々、ランクEでレヴァイの森のレッドワイルドボアを討伐か……。

ただ討伐で命張ってる割には報酬が400シンツて安い気もするが、このランクだったらこんなものなのかな……？

まあいいや、実力確認の為に良くのだからこれ位で一度良いか。

「ああ、これでお願いするよ」

「つょーカい。じゃあもう一度カードを貸してもいいだろ」

俺がカードを渡すと、羊皮紙と共に機械に入れ、直ぐに返してき
た。

「はい、受け付けたわ。依頼が終わったらまたここでカードを出してもらえば確認できるから。

あとひとつかも言つたけど、素材も買取してるのでね」

「わかった、ありがとう」

「じゃあ頑張つてね」

俺はお礼を言つと、お姉さんに見送られながら旅立つて行くのであつた……。

つというわけで、やつて来ましたrevイの森。
先程、行くのであつたとかご大層な事を言つたが、プレクスタ城から2キロも離れて無いのです。

いやー、格好付けがいの無い距離だよね？

とりあえずここまで來るのに、ずっと《光学迷彩》^{インビジブル}を使用して来たのだが。

城を出る時以外には、人にも魔物にも出会わなかつた。
魔力の無駄遣いだつたよ。

さてと、早速だけど獲物を探すか……たしかレッドワイルドボアだつける？

直訳すると赤い猪ですか……俺は真つ赤な猪を想像しながら、森

の中を周囲の警戒もせず鼻歌を歌つていると、横の茂みからガサゴソ音が聞こえてきた。

俺は音が鳴るほうへ振り向き確認してみると、茂みから現れたのは。

ゴブリンだった。

RPGではお馴染みに魔物だけど、現実はゲームのコミカルさは皆無だった。

……寧ろキモかった。

しかも一体や二体では無い 全部で10体は居ただろう。

「あれー？ 僕って今ピンチ？」

……いや、チョット待ってくれ。初めての実戦でこの数は頑張りすぎだろ！？

ゴブリン達が俺の制止？ も聞かずに一斉にかかつて来た。

俺は咄嗟にナイフを引き抜き はしたが、この数をナイフ一本で対処できる自信は無いので、身体能力強化を自分に掛けた。

身体能力を強化された俺のスピードは、雪緒を凌駕するものだが。こんな木々の茂った場所で使えば、自滅するのがオチである。

なので現在自分に掛けているのは、思考加速のみである。

こんな場所で炎の魔術なんて使えば、大火事になりかねないので

俺自重。

といわけで、風の魔術を使う事にした。

俺は思考加速で、コマ落ちの様に見えるゴブリンの攻撃を、バツ

クスティップで躰しながら。

右手を前に突き出し風の刃をぶつけた。

ゴブリンの上半身が吹っ飛ぶ。

周囲のゴブリン達は、いきなり仲間の上半身が無くなつた事で、戸惑いだした。

俺はその隙を見逃さず。先程の風の刃を周囲全体に大量に生み出した。

結果 僕の前には、細切れになつた大量のゴブリンの死体が出来ました。

いやー、いきなりだつたけど、やれば出来るもんだな。

ああ……そういえば幼い頃にもや以下略。

しかし、この光景を生み出したのに、何とも思わない俺は俺で怖いな。

たぶん、これが人でも何とも思わないだらう……それが異世界の住人であるのならば。

だつてなあ、こっちの世界がどうなろうと知つた事じやないもん。

……俺達に害が無い限りは。

まあ、害があるから牙を剥くんだけどね。

さてと、「ゴブリン以外にも、木々が凄い事になつてているけど……まついいか。

いつその事このまま木々を押し倒しながら、探そつかと思つたが。一緒に巻き込んで気が付かなかつた……って事に為つたら面倒臭いので自重した。

さてどうするかと考えていると……俺の田頃の行いが良かつたの

か
現れた。

恐らく、ゴブリン達の死体の血の匂いに、吸い寄せられたのだろう。

二匹おられました。

ええー、またかよ。討伐依頼では一匹で十分なんですが……。
というか三匹って、明らかにランクEを超えてるのでは無いですか？

「はあ～」

俺は嘆息すると氣をとり直して、試してみたかった魔術を使って
みる事にした。

俺は一番近くに居た、レッドワイルドボア（文字通り赤くて大き
い猪でした）に向けて魔術を放った。

すると、いきなり四肢が消失した……レッドワイルドボアは、前
兆も無く達磨状態になってしまい、身動きすら取れなくなってしまった。

俺が使つたのは『一次元の消失（ディメンション・ゼロ）』、風
とも違い全くの前兆も無く、まるで消しゴムで、文字を消したかの
ように消滅するのだ。

試した範囲でだが鋼鉄も消せたので、俺の魔力とも相まってガーネ
ト不可能な技になつた。
さすがに反則過ぎるので余り使つ気にはなれないシロモノであつた。

まあ今回は、初めての実戦で、生き物を使うのも初めてなので試

してみたが。

範囲自体はたいした事無いが、威力は流石だつた。

俺は残りの一匹にも使い。四肢を失い、出血しながらも暴れてい
る三匹に、脳天に髪の細さ程のものを放ち絶命させた。

うん、これは強すぎて訓練にならないな。

しかも、優雅さの欠片も無いではないか。

無言で魔術でもつて虐殺つて、完全にホラーだよな?
次回からは形だけでも魔術銘くらいは言つことにしよう。

俺は気をとり直して、売り物になると言われた、牙と皮をナイフ
で剥ごうと思つたら、魔術で消せば良いじゃないかと思い直した。
肉だけを消滅させたら、見事に牙と皮だけが残しました。

人はこゝにして便利さに慣れて行き、堕落して行くのだろうな

……

そんな益体も無い事を考えながら、戦利品を鞄にしまいドアを取
り出した。

とりあえず、訓練の心算で来たのに、全く訓練になら無かつた…

次はもう少し自重せねばと考えながら、何処でもドアで街まで戻
つた。

……あつ！ 例の科白をいつのを忘れてしまつた…？

様式美つて大事だよね？

第七話 それ無理！

「この世界に来てから、既に一月が経とつとしていた。

そろそろこの国の連中も、俺達の事を一般民衆に、公表する時期になるかもしれない。

もう悠長に動いている場合では無いのだろう。公表されてしまえば、俺達の顔が知れてしまう。

そうなれば、たとえ逃げ出したとしても、下手に動けなくなってしまう。

そんな事を雪緒と相談していた時にそれは起じつた。

トントン！

不意に扉をノックする音が聞こえた。

「勇者様方居られますでしょうか？」

「ああ」

俺が返事をするのを確認すると、セイナーレが部屋に這入つてきただ……。

いや、這入つてきたのは、セイナーレだけでは無かった。

亜麻色の髪少女　いや、幼女と表現しても良いかも知れない。

その娘が、セイナーレと伴つて泣きながら、俺達がいる部屋に這入ってきたのだ。

泣いているだけならまだ良かった、ただその娘の格好が問題だつ

た 制服に背中に背負つてゐるはどう見たつて……「ランドセル
だつた……。

「なあ、セイナーレ……その娘はなんなんだ」

「はい、勇者様でおられます」

「…………はつ？」

耳を疑つよくな答へが返つてきた……今……何で云つた？

「ですから、勇者さまと……」

嗚呼　頭の中が怒りで真つ赤に染まつていく……。

抑えろと理性ではわかっているが。感情がついていけそうに無かつた。

俺の怒りとともに周囲が呼応するかの如く、魔力が見える程のレベルで揺らぎだした。

「ど、どいつうこと！？　まさかまた勇者召喚がされたの！？」

雪緒も酷く狼狽していた。

「はい、国王陛下が偶然巨大な魔力石入手されたらしく、それを利用して呼ばれたらしいと」

俺が調べてわかつた事だが、勇者召喚には莫大な魔力が必要となる。

俺達の場合は、あの召喚の間は、元々魔力が集まりやすいらしい、

その上で二百年以上使用されてなかつたので、一度に一人も呼ばれたらしい。

ただ、俺達の召喚で殆どの魔力を使用しても、数十年以上かかる筈だったのだが……

だから俺は
俺達はその情報を入手して、勝手に安心していた

ガリッと奥歯を噛みしめ、手を強く握り締めた。

強く噛みすぎたのか口から血を流してしたり、爪が深く食い込み、出血する感覚もあったが、とてもでは無いが、抑えられそうに無かつた。

これは俺の考への甘さが生み出した事だろ？……俺達が逃げ出さなければ、呼ばれないだろ？……。

例え逃げ出してもまだ先の事だろうと……。

雪緒は騎士団長を圧倒した……俺だって片鱗とは言え、この国の大魔術師の前で力を見せてしまった

「…」が特別な方を指す。間違った自分達一行川へ運んでいた。

い 駒を増やせり。

その結果がこれだ？

怒りと間抜けさで、俺は手で顔を覆いながら笑いを零していく。

俺の見通しの甘さが、考えの甘さが、行動の甘さが、この事態を招いた。

何故思い至れなかつたのだ、その程度の事を。その程度の発想を……。

そうだ……偉そうな事を言いながらも、悠長に事を構えていた俺の責任もある。

だけど呼ばれたのがこの娘だと? どう見たつて子供だ。 そり、俺だって子供だ。

だけどこの娘は幼く、どう見たつて小学生で……両親の名を呼んで、泣いている子供に、世界を救つてくれつて叫ぶのか? 縋るのか?

この国は? この世界は? 鳴呼……そんな世界ならば滅んでしまえ! !

「ふざけ ！」

俺はセイナーレに問い合わせよつとするが、俺を呼びかける声が聞こえた。

「だ、ダメ! 遥くん抑えて……お願ひ。」

先程まで取り乱していた雪緒だつたが、怒りで自傷を厭わない俺をみかねて、俺の手を掴み止めに掛かった。

「だ、ダメ、ダメだよ遥くん、気持ちはわかるけど、お願ひ! 今は抑えて」

雪緒は俺を抱きしめながら、優しく語り掛ける様に言つた。

「今遙くんが動いちやダメ、下手をすればこの子を巻き込んでしゃう」
「……

その一言で俺は一気に頭が冷えていった。

「あ、ああ……そつ……だつたな。
ありがとう雪緒……」

「う、うん……うん……」

「そうだ、まだだ、まだ早い、今がその時ではない……怒りは噛み殺せ、今は雌伏の時だ。」

俺はセイナーレに向きなおさと、訊ねた。

「その娘を俺達の前に連れて來たって事は、俺達と回り合いで扱うのか」

「はい、その通りでござります」

幼からうが関係無しか……表面だけは繕つていろが、どう考えたつて奴隸だね。

奴隸　で思い出したが、この娘にも例の魔術をかけているのか

？

「なあ、この娘にも例の魔術はかかるといるのか？」

セイナーレは例のと云われて、少し考えていたが、すぐに思い当たつたのか答えた。

「はい、國王陛下の対応をみると、恐らくは……」

また怒りで頭に血が上りそうになつたが、雪緒が手を握つててくれたお蔭で、何とか抑えた。

「…………そつか

「新しい勇者様は、お一方のどちらかと共に、一緒に暮らして頂けないでしょうか」

勇者は未だ公表されていない存在だ。

だから一緒に預けてしまおうつて、考えなんだろう。

この娘はまだ幼い、尚の事この国の連中なんかに預けられる訳が

無い。

なので是非も無い申し出だ。

「ああ、わかつた、その娘は俺達が責任持つて預かろう」

「左様でござりますか。ありがとうございます。

あと序でとは申しますか、事情等の説明につきましても、お一方にお任せ致します」

セイナーレは俺達に用件だけ告げると、連れて来た娘を残して出て行つた。

「（）に連れて来られた少女（いや幼女か？）は、暫く泣いていたが、漸く落ち着いたので、話を訊く事にした。

「お姉ちやんたちだれ？」

「お姉ちやん……たち？……たち……だと？」

俺はその科白を聞くと、徐に窓枠に足をかけた。それに気が付いたのか、雪緒は慌てて俺を止めにかかった。

「は、遙くん！ ダメだよ。」（）階だよ。幾ら遙君でも、こんな高さから落つたら怪我しちゃうってば！」

「離せ雪緒！ も願いだから逝かせてください…」

「ダメだよ。危ないよ…」

「だつて、俺のこと、ね……お姉ちやんって……」

「遙くんが、性別を間違えられたのを、気にしてこるのは知っているナビ、今は我慢して…」

「それ無理ー！」

俺は雪緒から手を振り払つて、窓の外に飛び出した。

「アーアイ！ キヤーン！ フラーアイツー！」

てな遣り取りが、有つたとか無かつたとか。

というわけで色々話を訊いてみたが、名前は御影絆と言い、小学一年生でまだ七歳らしい……。

絆は俺達の説明を聞いて、直ぐに理解てくれた。なんて聰明な娘なんだろう。

同い年の頃の俺を思い出すと、恥ずかしくなつてくれる。

ランドセルを背負つて居たからわかる様に、下校の途中に、俺達と同じように、気がついたらあの部屋に居たらしい。
気がつき見渡せば、知らないジジイ共に囲まれていたら、それは怖かつただろ?」

そしてなにより『隸属の魔術』^{アレ}だ、俺には効かなかつたが、雪緒に訊いた話しだは、全身に激痛が走るらしい。
それを訊いてまたキレそうになつたが、絆の前なので自重した。

「おにこひやんじうかした?」

絆は俺を見上げてきた。

そう、何故か今、絆は俺の膝の上に座つている。
座り位置を確かめるように、俺の太腿にグリグリとお尻を擦りつけたりしてゐるんだが。

……これって、何かの拷問でしょうか?

いろいろ話したり、訊いたりしてゐる内に……異常に懐かれた。
何か自分の事で怒つてくれていた事が、嬉しかつたらしい。
他にも椅子は空いているのだが、そちらに座るので無く、俺の

膝の上に座り、嬉しそうに見上げているのだ。

となりに雪緒がいるんだが、俺達をジッと見つめて……いや、何故か睨んでいた。

痛い、視線が痛いですよ。雪緒さん……。

「…………いや、何でも無いよ…………」

いや、何でも無い事はないんですよ？ 具体的に言えば雪緒の視線が怖いから、膝から降りて欲しいなー。向て思っているんですけど。流石にさつきまで泣いていた絆に、言ひのほ憚られた。

「絆ちゃん……遙くんも困つてゐみたいだし、そろそろ降りてあげたら？」

「おおー！ 雪緒さんへ言つてくれた。

「ヤツー！」

絆は有無を言わず、雪緒の申し出をぶつた切つた。

雪緒の顎口（あかも）がピクピク動いている。だから怖いですしつ。

何で俺まで睨むんですか？

俺はその状況に、ただ苦笑いを浮かべる事しか出来なかつた。

しかし、これから対応を、真面目に考えなくてはいけなくなつた。

今まで何だかんだで、暫く再召喚は無いだらうと、高をくくっていたのだ。

これでは魔力石が見つかれば、また同じ事が行われる可能性が高

いだろう。

そう成らないように、気をつけて行動していた心算だったのだが、
そうなつては本末転倒だ。

だったらそろそろ、力ずくと云つ手段も考慮に入れて良いだ
ろう。

魔術を掛けた魔術師に、解呪の方法を口を割らすか、もしくは殺
害と云う手段もある。

なんせ此方には、連中ジョーカーが知らない切り札を何枚か持つてているのだ。

ただこの手段をとる場合には、一人には知られ無いようにしない
とな。

彼女達は巻き込まれただけだ。

あんな連中とは言え、彼女たちが態々手を汚す必要は無いだろう
から。

第七話 それ無理！（後書き）

「意見がありましたので補足しておきますが、主人公はロリコンではありません。

意図せずグリグリ刺激されれば、ある部分は反応しそうになるものだと思い、そう表現しました。

寧ろ子供に反応しちゃ駄目だろ。

第八話 マジパネヒツよ。

俺は絆の力を調べる為に、ギルドカードを使ってみる事にした。まだ幼いとはいえ、勇者召喚で呼ばれている以上、俺や雪緒に近しい能力を持つているかもしれない。

これから先の行動を考えるのに、絆の力を知つておいた方がいいだろうと、考えたからだ。

ギルドカードの予備は、事前に城の中で、何枚か調達して鞄に保管しているので、それを使う事にした。

俺達が来た時には、セイナーレに貰つたんだが、今回は貰えなかつたので、何でだろうと疑問に思つたが、俺が幾ら考えても説無いので、この場では考えない事にした。

ただ単に、忘れただけの可能性もあると思つし。

俺は絆を膝に乗せたまま、鞄から未登録のギルドカードを取り出した。

「おにいちゃん。それな～に？」

絆は、俺の持つているギルドカードが気になつたのか、訊いてきた。

「ああ、これはギルドカードって言つて、まあ簡単に言えば、身分証みたいなものかな」

「そおなんだ？」

絆は俺からカードを受け取ると、興味があつたのか、表裏を確認

しだした。

そして、そんな光景を、ジッと睨みつけている雪緒さんが横に居ました……。

その、なんとか、もの凄いプレッシャーと自力で、非常に怖いです。

そして、そのプレッシャーをものともしない絆さん　流石としか言い様がありません。

お兄さんは今すぐにでも逃げ出したいです。脱兎の「」とく。

あれから絆は、気がついたら、俺の膝の上に座っているのだ。この世界での、特等席らしい。

そして、田に田に何故か、雪緒からプレッシャーがあがつて来ている。

女の子はよくわからん。

ともかく俺は、雪緒のプレッシャーに耐えながら、説明を再開した。

「これ、何も書いてないよ？」

「これには、文字を書く為に血が必要なんだ。」

「……血？」

絆が不思議そうな表情を浮かべている。

俺は自分の髪の毛を引き抜くと、魔力を通して、一時的に針と同じ硬度にした。

「で、絆には悪いんだけど、指先にチクッとこれを刺して、カードに血をつけて欲しいんだ。」

「……ヒツー？」

絆はそれを聞き、少し驚き怯えた表情を浮かべた。

「本当に、指先にチヨットだけでいいんだ、血を付けたら直ぐに俺が治してあげるから」

そう、俺は大怪我でもない限りは、治癒魔術で治すことができる。

「……本当？」

「ああ 本当だ」

絆は俺の言葉を信じてくれたのか、俺の髪針を受け取ると、恐る恐る自分の人差し指に刺した。

刺した事で、人差し指からプクッと血が出てきて、ギルドカードに血を塗っていた。

血を塗った事を確認した俺は、直ぐに治癒魔術を、絆の指先に施した。

「絆。痛みはあるかい？」

「ううん。ぜんぜん」

絆は不思議そうに、自分の指先を眺めたり、舐めたりしていた。

「うわあ……本当に、ぜんぜん痛くないや」

「そつか よかつた」

俺は絆を誓めるよ、^{アリス}頭を優しく撫でた。
その光景の隣で、また怒ったような、物欲しげそうな、何とも言
いがたい表情を浮かべた雪緒が居りました。

……雪緒も頭撫でて欲しいのかな？

「うわ、うわあ……なんかこれ光ってるよ?」

絆は感嘆の声を上げていた。

恐らくギルドカードに、^{ステータス}能力が表示されたのだろう。

「絆。良かつたら俺にも見せて貰つてもいいかな?」

「ん? おにいちゃんも見たいの? はい」

俺は絆からカードを受け取ると、^{ステータス}絆の能力を確認した。

名前：御影絆
AGE : 7
SEX : 女
LV : 1
JOB : 聖女
HP : 351
MP : 344
STR : 127

VIT : 189

AGI : 99

DEX : 135

INT : 812

RST : 697

LUC : 2858

称号：プレクスタの隸属

特性：聖女の威光、高速詠唱、呪術解除、呪術感知、魔術耐性

装備：学校制服

祝福：なし

ギルド：なし

なにこれ？俺や雪緒に比べても、全体的に能力高すぎるだろ……。

職業が『聖女』って事は、俺と同じで『勇者』では無いのだろうけど、能力値だけで言えば、『勇者』であろう雪緒より強いじゃないか。

……『勇者』より強い『聖女』ってなんですか？

H.P.が紙な俺に対しても遙に高いし、何より運が高すぎるだろ……。年下でもある絆が、俺達よりも強いかも知れないと思う能力値を見つめていると、ある項目に気がついた。

『呪術解除』

……チヨット、まつてくれ。俺は自分の頭を抑えながら考えた。ええっと、もしかしてこれ、奴らに掛けられた魔術を解除できるんでは無いかい？

俺は一ヶ月アレだけ探ったのに、全く解除手段が見つからなかつたのに、ここにきてこうこう事つて有りますか？

俺はいろんな意味で、眩暈がしてきた。これがそんならば、俺の一ヶ月は、完全なる徒労では無いかな……。

まあいい、鴨が葱背負つて遣つて来たんだ、ラッキーだと思つて開き直るしかない。

早速だけど、試させて貰おう。

「なあ絆、頼みたい事があるんだけど」

「なに？ おにいちゃん」

「ちょっと雪緒に違和感が無いかどうか、試してほしいんだ」

絆にある特性アトリティ《呪術感知》これが俺の持つてゐる特性と、同じ様な物ならば、もしかしたら何かを感じるかも知れない。

「……遙くん。どうこう」と?

雪緒も俺の頼みに不思議そうに訊いてきた。

もしかしたら……なので、万が一違つたらぬか喜びになつてしまつので、答えをばぐらかした。

「 チョット気になる事があつてね。試してみたくなつたんだ」

雪緒も絆も俺の答えに、とりあえずは納得してくれた。

「で、おにいちゃん。絆はビリすればいいのかな？」

「ああ、雪緒に手を翳す様にして、何か感じるか集中してみてくれ

「うんー。」

「雪緒はそのまままで、動かないでいてくれ

「……ええ」

俺がそう説明すると、絆が手を皿の前に差し出した。
そして皿を瞑り、ウーン、ウーンと唸ついていた。

「 「 」 」

俺も雪緒も黙つていると、絆が声を上げた。

「あれ？ なにこれ？」

「どうした、何かあったのか？」

「うふ..... ゆきおおねーちゃんの中に、なんかモヤモヤしたものがあるの」

モヤモヤ？ もしかしてそれが、例の魔術なのか？

「絆。そのモヤモヤを消す事って出来るか？」

「うーん。よくわからんないけどやってみる」

やう答えると、絆は再び同じ格好をして唸りだした。

俺達は黙つて見つめていると、俺は雪緒の体から、魔力が消えていくのが見えた……。

「おにいちゃん。よくわかんないけど、ゆきおおねーちゃんからモヤモヤが消えていったよ?」

「雪緒! チョット、カードを確認してくれないか! ?」

雪緒は不思議そうな表情をしていたが、俺の言葉に素直に従つた。絆の能力が確かに、俺の《魔術感知》がアレを見たとしたら、もしかしたら……。

「……えつ! ? なんで?」

雪緒の反応を見るに、俺の予想は正解だつたみたいだ。なんていうか、絆ちゃんマジパネエつすよ。

「遙くんも見てみて! ?」

雪緒は俺にもギルドカードを見せってきた。

名前：五十鈴雪緒

AGE : 17

SEX : 女

LV : 4

JOB : 勇者

HP : 411

MP : 221

STR : 296

VIT : 309

AGI : 294

DEX : 239

INT : 217

RST : 222

LAC : 1051

称号：なし

特性：危機感知、高速治癒、高速移動、高速詠唱、見切り、肉体強化

装備：ベイルの聖衣

祝福：なし

ギルド：なし

……もう俺いらなくね？ 『勇者』と『聖女』でもの凄く形になつてるし。
ここに俺の『愚者』つて意味がわからん。

なんて事を一人に言えば、泣かれかねないので言える訳がないの
だが。

自分でも言つのは何だけど、一人とも俺に依存し過ぎな節がある
し……。

頼られるのが嫌つて訳では無いんだよ。

雪緒も絆も美少女つて言えるような娘だし。

ただ、俺が居なくなつたらヤバイな、何て思わなくも無い。

まあ俺も、居なくなる予定も心算は無いのだから、特に問題は無
いか……。

ともかく、最大の懸念だつた問題が解決されたのだ。
あとは逃げ出す準備をするだけだ。

まあ此処までされたのだ、ただで抜け出す心算など更々無いのだ
が。

第九話 そんなん知らんがな。

俺達を公表する日が決まつたらしい。
それは、十日後にあるといつ、建国記念祭にて、大々的にお披露
目するらしい。

勇者が召喚されるのは、数百年ぶりという事で、国民の人気取り
や、他国への牽制の意味合いもあるのだひつ。
つまり、現時点では一般市民には、勇者が召喚されたと云ひつ事實
だけが、公表されているのだ。

完全に顔が公表されてしまえば、俺達は下手に逃げ出せなくなつ
てしまふので、逃げ出す準備を始めた。

「武器……ですか？」

そう言つたのは雪緒だった。

「ああ、専用武器を創つたかと思ひ」

「遙くんはもう、なんでもありますね……」

何故、このような会話になつたかと言ひど、これから先の事を考
えて、武器を用意しようかと思つたからだ。

この国を出た後、どうなるかは分からぬが、外には普通に魔物
が存在するのだ。

だったら、自衛の手段の一つとして、武器も必要になつてくるだ
ら。

俺は何処でもドアを作った際に、称号『魔道具製造者』^{マスター・メイカー}取得している。

他にも取得した特性で、武器ぐらり創れるんじゃないのかと思つた。

俺は今後の資金や報復を考え、この国の宝物庫に忍び込んだんだが、流石は神光国家を名乗つてゐるだけあって、宝物庫の中には金品の他に、聖剣やら魔槍など沢山あつたが、そのまま使うのは面白くないと思い、特性『アビリティ 物質干涉』^{アビリティ}『物質操作』^{アビリティ}を試してみたら金属塊になりました。

まあ、見る人が見たら、もの凄く罰当たりな行動なんだろうけど、そんなん知らんがな。

ともかく、お蔭でオリハルコンやミスリルといった、金属塊^{インゴット}が手に入ったのだ。

忍び込む際当然だが宝物庫にも、魔術によつて封印されていたが、例の如く俺の魔術抵抗力の前では無意味でした。

もちろん、金品の方も「ゴッソリと、鞄の方に戴いておりますよ。ただ鞄の口の大きさなど、高が知れていますので、収納する時にはもの凄く苦労した。

それも今なら、いい思い出と思い出せ…… そうにも無いな。

持ち出した事がバレない様に、再封印した上で一応幻術の魔術を掛けたので、この国の連中が、まず宝物庫から持ち出そうと考えない限りはバレないだろう。

まあ後十日持てばいいのだから、楽勝だろうが。

ともかく、折角こんないい物が在るのだから、有効活用しようと考へた。

俺はぶつちやけ魔術^{チート}が反則なので、武器などは要らないのだが。

雪緒や絆は高速詠唱があるとは言え、それでも詠唱に時間がかかる上、魔力量も俺に劣る。

だつたら、インゴット金属塊に戻せるのなら、武器にも創り直せると想いついたのだ。

本当に何でもありだな俺？

「で、雪緒は何か希望があるかな？」

「ねえー？ 絆の分ある？」

先程から雪緒ばかり相手にしていたので、少し頬を膨らませた絆が訊いてきた。

「ああ、絆の物も後で創つてやるから、チョット待つて貰つてもいいかな？」

「うー。……わかった、待つてる」

絆はそう言つと、俺のベットの上にパタリと倒れ、足をバタバタさせていた。

俺は気を取り直すと、再び訊ねた。

「せつかも言つたけど、希望はあるかな？」

「それって、どんな物でも出来るんですか？」

「ああ、多分だけどね。実際にはまだやつた事が無いから、出来るかどうかはわからないけど、折角だから一人に会わせた物を創りたいなと思って」

「そう……ですか、だったら刀はできますか？」

「 刀？」

「はい。この世界に来て、あたしなりに調べたのですが、刀の様な武器は存在しないらしくて」

「つづことは、雪緒は剣道か何かの経験者なのかな」

「ええ。剣道では無く、剣術なんですけど……」

初めて戦う所を見たとき、何かしらの経験者かとは思つたが、まさか剣術とは……。

「剣術なんて使えたんだね」

「お父様に、幼い頃から教え込まれたの」

……お父様入りましたー。流石は清蘭に通つてただけあって、お嬢様だつたんだろうね。

「そ、そつか……ともかく刀ね」

刀か この世界では刀は、管理とかいろいろ面倒だから、作られて無いのかも知れないな。もしくは技術が無いか。
ともかく、雪緒が扱いなれているのなら、それを用意してあげるべきだろ?。

「わかった。やってみる」

俺はセーフティードレグから「ゴン、ゴン」と金属塊を取り出した。今回使
用しようと思つていいのは、聖剣からとりだしたオリハルコン。
流石は聖剣でした。まさかオリハルコンが作れるとは思わなかつ
たが、折角だからこの際使おうと考へたのだ。

やつぱり勇者の武器と云々ば、オリハルコン製だらう。

「それで悪いんだけど、この金属塊に血を垂らして欲しいんだ」

「 血……ですか？」

「ああ、さつきも言つたけど、専用武器つて事で、雪緒以外には使
えないよつにしたいんだ。

それで、ギルドカードみたいに、雪緒の個人情報を登録しよつと
思つて」

「……遙くんが、そつぱつんでしたら」

俺が髪針を雪緒に渡すと、躊躇無く指先に刺した。

……雪緒さん、男前過ぎるわー

「これで、こいですか？」

雪緒は金属塊に血を垂らすと、俺にそつ訊いてきた。

「ありがと。これだけあれば十分だよ」

俺は雪緒にそつ告げると、出血している場所に治癒魔術を施した。

「じゃあ、やつてみるから、少しぐってて」

「 はー」

雪緒が下がるのを確認すると、俺は《物質干涉》《物質操作》《魔術操作》を使用した。

……折角だから、成功するかどうかはわからないが、アレを試すこととした。

金属塊が輝き、次第に刀の形に様相を呈してきた。
輝きが収まると 日本刀が出来上がった。

それにしても、出来るとは思ってはいたが、本当に出来るとは…。

「 雪緒。 チコット試してみて」

俺はそのまま、雪緒に先程出来たての、日本刀を渡した。
雪緒はそれを受け取ると、無言で刀を振り始めた。

次第に もの凄く優雅な剣舞を舞だした。

俺が見蕩れていると、それに気がついたのか、雪緒が少し恥ずかしげに刀を返してきた。

「 は……遙くん？」

「 はっ！ ああ、悪い見蕩れていたよ」

「 へっ？」

俺の言葉を聞いた雪緒は、顔を真っ赤にしていたので、俺は訊ねた。

「どうかしたのか？ もしかして体調でも悪いのか

「いいいいいい、いえ！ なんでも無いでしゅ！」

吃り噛んだので、少し気にはなつたが、本人が大丈夫だと言うので、気にしない事にした。

「そ、そうか。大丈夫って言うんならそれでいいが。

……それでその刀はどうかな？」

「はい。かなり良いですよ」

「 そつか、良かつた。後ためしに、その刀に魔力を流してみて
くれないか」

「魔力……ですか？」

「ああ」

「……わかりました」

雪緒はそう言い、刀に魔力を流しだすと薄く輝きだした。

『ハジメマシテ。マイマスター』

「……えつ？」

雪緒はいきなり呼びかけられ、驚いていた。

「えつ？ エツ？ デコから声が？」

俺は、笑いがこみ上げてくるのを抑えながら答えた。

「ククッ それ、その刀から呼びかけられたんだよ」

『ソノトオリデス。マイスター・ハルカ』

再び呼びかけられて得心いったのか、雪緒は刀を見つめた。

「貴方が呼んだの？」

『ハイ。マイマスター』

「遙くん。これって？」

「うん。それはアニメとかを参考に創った、魔導知能兵器インテリジェンスウェポンって物。どうせだからだからと思って、試してみたんだ。

まさか本当に成功するとは、思わなかつたんだけどね。」

なんでもでは無いだらうけど、大概の事は出来るな俺。

「魔導知能兵器インテリジェンスウェポンですか……？」

「ああ。一応人格は女性格には設定しているから。

戦闘とかでも状況に応じて、魔術とかでサポートしてくれるかと思つてね。

ただ、まだ産まれたばかりなんで、単純な受け答えしか出来ない

から

「そうなんだ……ええっと、ようしけね。……あたしはなんて呼べばいいのかな?」

「ん? ああ、その刀の銘は雪つって言つんだ、《靈刀・雪》が正式な名前になるのかな。

一応雪緒の名前に引っ掛けでみたんだけど」

雪が溶けて零になる 安直かもしけないな。何の捻りもない自分のネーミングセンスの無さに、鬱になつてくる。

そんな俺の葛藤など知らず、雪緒は零に挨拶していた。

「そうなんだ よろしくね零

『ハイ。ヨロシクオネガイシマス。マイマスター』

俺は気持ちを切り替えて言つた。

「さつきも言つたけど、零は雪緒にしか扱えないから。

他に例外居るとすれば、一応製造者の俺ぐらいなんだろうけど……。

ともかく、その子は雪緒の相棒つて事で、良ければ大事にしてやって欲しい

「ハ、ハイッ！ 遥くんからの贈り物ですからね

雪緒は嬉々として、零を抱きしめていた。

おこおい、むき出しの刀を抱ぐとか、危なすぎるだろ。

そういえば、鞄を創るのを忘れていたので、鞄からそれらしい材料を取り出すと、鞄に変化させ雪緒に渡した。

「剥き身の刀を抱くのは危ないから、これの中に仕舞つた方がいいよ」

「あー、ううですね。わたしつたら、つづつかり……」

雪緒は俺から鞄を受け取ると、刀身を仕舞つた。

……つづつかりで自傷でもしたら、洒落にもならんだろうと思つたが、俺はおぐびにも出さなかつた。

そして今までベットの上で、俺の枕の匂いを嗅ぎながら、恍惚としていた絆に声を掛けた。

「そ……それで、次は絆の番なんだけど……」

「う……ん……？　お兄ちゃん呼んだ？」

今まで静かだったから寝ていたと思つていたが、完全にトリップ中です。ありがとうございました。

絆よ、その歳で匂いフェチとは、ハイレベルすぎるだろ。俺は気持ちを切り替えると絆に訊ねた。

「……も、もしかして寝てたかな？」

「ううん。はふー、お兄ちゃんの匂いを堪能していたの。……ふい

ー

わざと寝ているか訊いたの?、正直に答えないでくださいよ……
時折艶つぽい溜息が出ているし。

恐るべき七歳児。いまどきの小学生ついにいつのまにか? だとすればレベルが高すぎるぜー!

「へ、そうか。それは良かった

……それは良かったのか? 自分で言ひていて訳がわからなくなつてきた。

「うさ。けつこつなお手前で……」

え? 句いでなにか、上手いとか下手とか存在したのか?

匂いつて奥深いんだな……。

……つて、ヤバイ、だんだんついて行けなくなつてきた。

「ああ……ありがと!」

「…………」

俺は気がつかば、何故かお礼を言つていた……。

このままではイカン! 俺は話を切り替えるために言つた。

「そ、そつ。そんな絆の分に取り掛かろうとしたが、絆も希望があるかな?」

「う、うーん? 絆はゆきおおねーちゃんみたいに戦えないし……わたしつて魔術つかえるんだよね?」

「ああ、その筈だけだ」

「だったら、魔法の杖みたいな物……できるかな？」

絆は上目遣いで俺を見てきた　この娘わかつてらひしゃる。

これがもし計算だとしたら末恐ろしいよ……。

俺はこの行動が天然である事をただただ願つた……。

「ああ　大丈夫だと思う」

「本当！？　じゃあおねがい」

「あいよ」

俺は鞄から、魔槍から戻したアダマンタイトと金を取り出し。ふと　思いつき、更にムーンストーン媒体にすることにした。

アダマンタイトと金は、魔術性能と含有魔力を引き上げる為に、混合する事にした。

通常じやそんな芸当など出来はしないが、そこは俺のハチャメチヤ魔術です。

俺は絆に、雪緒と同じ様に血をお願いすると……こちらも躊躇いなぞ無かつた。

ヤバイこの一人、明らかに俺よりも男前だ。俺が女だったら惚れてるね！

「お兄ちゃん。これでいい？」

「ああ……何て言つか、カッコいいな」

「……？」

絆は俺の誓め言葉を、理解はしていなかつたみたいだつた。さうに自分で治癒魔術を使って治しているよ。

……嗚呼、もうお兄ちゃんいるないね……等と、訳のわからない感慨に耽つていると。

「お兄ちゃん。泣いてるの？」

俺は、そう言われて初めて、涙を流している事に気がついた。
もう、わけワカメ。

「何でも無い、何でも無いんだよ」

そう、アンタなんかの為に、泣いてるんじゃないんだからね！

「う、うん？ ……お兄ちゃんがそういう言つんだつたら……」

絆は腑に落ちない表情をしてはいたが、一応納得してもらつた。
……あれ？ 俺年下に氣を使われてる？ その事に気付き俺は愕然とした。ともかく、俺は気持ちを切り替えると、再び作業に取り掛かつた。

創る物をイメージする。

刀の場合は、元の世界で昔に見て触った事があつたから、比較的簡単に出来たが、今回は完全に想像だ。

俺は魔法少女をイメージしながら、^{ながら}能力行使した。

合成金属とムーンストーンは、融合し次第に 指輪に成つてい

た。

それを見た絆は、不思議そうに訊ねてきた。

「あれ？ 杖を創るんじゃなかつたの？」

「いいや、これで成功だよ」

「……？」

絆は俺の答えに、不思議そうな表情を浮かべている。

「じゃあ、これを指にはめて魔力を流していこう」

絆は俺から指輪を受け取ると 左手薬指にはめました。
今まで黙つて横で見ていた雪緒は、絆の行動を見て咎めた。

「……あ、絆ちゃん。なんでわざわざ、その指にはめるのかな？」

穏やかな般若が、顎口（あかも）と口角をヒクヒク吊り上げながら言った。
俺は横で、ブルブルとチワワの如く恐怖で震えている。
そんな俺の行動も意に介さず、絆は答えていた。

「お兄ちやんがくれた物なんだよ。他にどうつけねばいいの？」

「あははー。それってどういう意味かな？」

怒りで笑いが出てますよ雪緒さん

俺は恐怖に耐え切れず、二人の仲裁に入った。

「…………まあまあ、雪緒子供がすることだし……ね？」

「む、ムウー。遙くんがそう言つんだつたら……」

「絆も、挑発するような事を言わないの」

「はーい」

俺は殴つ合ひの試合で、レフHリーとして突っ込んだ氣分だつた。

一応雪緒の方が年上つて事で、渋々だが引いてくれたみたいだつたが。

ともかく俺は、再び説明を再開した。

「じゃあ、チョット魔力流してみて?」

「うん……」「かな?」

絆がムーンストーンの指輪に魔力を流しだすと、絆と共に輝きだした。

次に輝きが収まると、絆は杖を手にして格好も変わっていた。

おっしゃ!

俺は心中でガツツポーズをした。

魔法少女といえばヤツパリ変身だろ?

今の絆は、普段はストレートの亜麻色の髪を、ポニーテールに纏めており、服装も学校制服から、腰に大きなリボンをつけた真っ黒のゴシックドレスになっている。

そして手に持っている杖は、用をイメージして作り出したのだ。

「へ？ これ？」

「どうだ？ 魔法少女ってイメージで創ったが」

なんとなくイメージしたのだが、俺の中の魔法少女はゴスロリだったのか……。

「……うん」

「……遙くん……なんていうかもう……何でもありだね」

あれー？ ダメだった？

……もしかして、ゴスロリか？ ゴスロリがダメだったのか？

「……その……もし、気に入らなかつたら……」「めん

俺はガクーンっと、テンションがダウンした。

何故だ？ ゴスロリってそんなにダメなのか？ 「ゴスロリだぜ、ゴスロリ。」

部屋の隅で体育座りをして、イジイジとの字を書いていると、絆に声を掛けられた。

「ううん。驚いただけだから。うん。気に入ったよ、何しろお兄ちゃんが創ってくれた物だからー。」

「……そつか、ありがとう」

俺は慰めに、抱きしめてきた絆を俺から抱きしめ返し、頭を撫で

ていると……雪緒さんが睨んでいました。

あれー？ なんで？ 何処かで選択肢を間違えたかな？
果てし無く怖いです。

俺、最近雪緒さんに睨まれてる事多くないですか？ 本当なん
だうつ……？

「お兄ちやん。これって喋るの？」

「ん？ ああ、これには魔導知能兵器インテリジェンスウエポンでは無いよ」

「……そつなんだ」

「うん？ もしかして、そういう欲しかったの？」

「……うん」

雪緒みたいに前衛つて訳でもないから、そういうたサポートもい
らないと思い、代わりにいろいろ変身機能を入れた為に、省いてい
たのだが、入れた方がよかつたのか。

「 わかった。チヨット指輪を貸してくれる」

「うん」

絆はそつ言つと変身を解き指輪を渡して來た。

……変身の解き方とかまだ教えていないのに、もつ使っこなして
いるよこの娘。

俺は指輪を受け取ると、再び魔力を押し込んだ。

「よつし、これで大丈夫だと思つ」

俺はそう言つと、絆に指輪を返した。絆はそれを受け取り、指に着けなおした。

「それじゃあ、呼びかけて『じらん』

「うん。こんなにけば

『ハロー、マスター キズナ』

絆が呼びかけると、指輪から返答がした。

「うわあ……うん、はじめまして、ええつと?」

「それは、ムーンライトって言つんだ」

「うん、はじめまして! よろしくねムーンライト

「イエス。マイマスター」

もちろん人格構成は、女性に設定しましたよ。
雪緒や絆を男性人格に任せれる訳がない!

そういうえば魔道具つて、かなり高額で取引されてるんじゃ無かつたっけ?

たしか最も安い物でも10000000シンとか言つていたよな。
俺のこの能力を使えば大儲けが出来るのでは……。
そう考えもしたが、自重する事にした。

自分で言つのもなんだけど、この様な強力な魔道具を売りに出せば、絶対に田をつけられるだろうから。

「これ以上の面倒」とは「免だ。

しかし残り十日とはいって、まだ時間は多少残っている。その間にで見る、俺は更なる暗躍を考え始めた……。

そう、早速だけど女風呂をのぞ……。

第十話 本当だよ？

覗きになんて行つてませんよ？ 本当だよ？

暗躍その壱

で、やつて来ました プレクスタ で最も大きい、公爵領です。元々情報収集の際に、有力貴族に関しての情報を得てはいたので、復讐と実益も兼ねて、財産などを盗み出す予定だったのだが、今までは万が一バレた場合、雪緒に迷惑がかかると思い自重していた。しかし最もの懸念材料だつた『隸属の魔術』が解除され、更に時間も無いと云つ事で、行動に移す事にした。

流石は公爵家だけあって、プレクスタ城には及びはしないが、かなり立派なお城でした。

俺は『光学迷彩』インピージブルを使用して、堂々と宝物庫など、城内の財宝を隠している場所を探る。

大概セキュリティの為に、魔術で出入り口など封じていたりしていたが、王城の宝物庫でさえ問題にならなかつた俺にとつては、それは無いに等しかつた。

俺にとつて最大の問題は、鞄に収納する際だ……あれだけは何とかなりませんか？

この世界でも非力な俺に取つたら、金塊の重さは洒落にならない。治癒魔術が無かつたら、翌日筋肉痛ですよ……。

この世界の金を持つてゐる貴族連中は、概ね魔術などでその場所を隠している事が多い、だから『魔術感知』を持つ俺には、鴨に過

ぎなかつた。

寧ろここに何かありますって、教えてくれてているような物だ。

……ヤバイ、笑いが止まらない。

とある貴族の書斎に押し入った時は、入り口が魔術で封じられたので、おかしいなとは思つたが、出るわ出るわ灰色では無く、真つ黒な帳簿などの書類たちが。

軍事に関する物もあつたので、敵対国に売れば高く売れると思ったけど、それをすれば悪目立ちしそうなので、自重する事にしておいた。

しかしどこの世界も、政に^{まつり}関わる人間は黒い、黒いね。

まあ一応念のために、鞄の中に保管させて頂いたけど……。

まつたく、いい事をすると氣分がいいぜ。

俺は、王都内と城から半日で通える範囲の貴族から、片つ端から盗みに這入つてやつた。

金銀財宝はもとより、武具の類は全部金属塊インゴットに戻して鞄に押し込んだ。

もちろん幻術を掛けた上で再封印しましたよ。

今回は十日程で解けるように設定しました。逃げた後バレたら面白そうだしね。いきなり一文無しになるんだし。

いきなり俺達に國を救えとか、それで命をベットしろとか言つたんだ。その程度の代償は背負つて貰わないとね。

俺も逃げ出す為に、先立つ物がいるから。

忌々しい召喚の間にやつてきました。

ぶっちゃけ、この部屋の正式名称は知らないのだが、興味も無いし知りたくもない。

ともかく、仕掛けを仕込んでいく事にする。

具体的に言えば『次元の消失』^{（ディメンションゼロ）}を仕掛けておいた。

これは再召喚をしようとするか、俺の合図で発動する様に設定している。

魔方陣自体に壊されない様、防御魔術が使われていたが、事前に『次元の消失』^{（ディメンションゼロ）}で色々試していたのだが、俺の魔術抵抗力すら貫通したので、誰が掛けたかは知らないが、問題にもならないだろ。

そして、俺はこの城内に存在する書庫全てに、同じ様に仕掛けておいた。

さりに念の為にも、この国の魔術師の部屋、全てにも仕込んでいる。

これで、この国での勇者召喚など、ふざけた事が出来ない筈だろう。

そんな感じで、ソソソソと暗躍しながら一週間が過ぎ、建国記念祭……つまり俺たちが、お披露目される事に差し迫っている二日前。

雪緒は初日に騎士団長を圧倒してしまったので、そのお蔭か訓練自体は任意に成っている。

なので今回も、雪緒も絆も訓練には参加していなかつたが、俺は偽装の為、こここの連中に落ち零れと思いこませる為にも、日常通りの剣術の訓練が終わり部屋に戻っている途中、騎士の集団に出くわした。

ここに来て既に一ヶ月以上経っているのだが、俺が見たことも無い連中だった。

男女10人程の騎士の集団……その先頭に立つていて騎士 長身一枚目で、男の俺からしたら劣等感を煽られる人物だが、その男の装備している物が気になつた。

俺の特性『魔術感知』^{アビリティ}が、男の鎧と剣にかなりの魔力が有しているのを見て取れたのだ。

俺が宝物庫で見た、聖剣に匹敵するかも知れない。

俺はその人物が気になり、セイナーレを捉まえて問い合わせました。

「 それは恐らく、ガフォーク？ヴェルヴェック様かと思われます」

俺はその名前に聞き覚えがあつたが、念の為に訊ねる事にした。

「 ……誰なんだそれ？」

「はい。勇者様は『栄光の騎士』^{ナイツ・オブ・グローリー}をご存知でしょうか」

「 ああ

《榮光の騎士》
ナイス・オブ・グローリー

「ニニ」『神光国家プレクスタ』が誇る最強の騎士団の名前だ。

如いてはこの『レミール大陸』の中でも、最強を誇る少數精銳の部隊らしい。

という事は、あの集団がそう云つ事だらうか……？

「では、ガフォーク？ヴェルヴェック様はその中で騎士ナイツで在らせられます」

「騎士ナイツの中の騎士ナイツは筆頭騎士。この国で最強の騎士に『えられる称号』。

つまりは、この大陸でも最強クラスの人物だと云つ事だ。

そう考えれば、あのレベルの装備をしていても納得がいく。

あれは王から贈与された、聖剣クラスの武具だったんだろう……。

しかし、長身一枚目でこの世界でも最強クラスって……俺の劣等感がジクジクと刺激された。

あんだけイケメンだとさぞモテるんだろう……死ねばいいのに。なんだよ、そんな人物が居るんならそいつに魔王退治頼めよな……。

そんな風に俺はやさぐれているが、セイナーーは気が付いていいのか説明を続けていた。

「今まで遠征されておられましたが、間も無く建国記念祭ともなり、その為帰還されたかと思います」

なるほど、だから今まで見かけなかつたのか、年に一回記念祭そんな一大イベントに、それが国を代表する騎士ともなれば、召集されもするか……。

しかし、今まで城に居なかつたので、特に書が無いと思ひほつといたが、これは逃げ出す際に面倒臭くなりそうだな……。

俺はそんな考えをおくびこもせぬ、セイナーレに礼を言ひと立ち去つた。

「……そつか、わかつた。ありがと」

「いえ」

俺は祭りの騒ぎに生じて、逃げ出そうと考えていたんだが、万が一阻まれたら如何するべきだらうか？俺達はこれから、この国に喧嘩を売るのだ。

……そづ、勇者召喚など愚かしい事をした事を、奴らに後悔させてやるのだ。

あと三日しかない。

第十一話 僕自重。

建国記念祭当日、空が白みかけ城下街は既に賑わっていた。今も外から賑やかな声が、ここまで聞こえてきている。

俺はふと、左手首に巻いている腕時計を見て確認した。

06:47

そろそろ、セイナーレが俺を呼びに来る頃だろう。念の為に雪緒と絆は、鞄を預けて何処でもドアで街の方に逃げてもらっている。今までの暗躍の中で、二人の説得が一番大変だった……。

もの凄い「ねられた」寧ろあの時、精神的に死ぬかと思ったよ……。

特に絆はヤバイ、マジヤバイ。

魔術を詳しく教えてもらいないのに、俺に催眠の魔術を掛けてきた。絆には俺の体質？ を説明していなかつたので、俺の魔術抵抗力があつたから効かなかつたが、万が一効いていた場合には、何をしていたんだあの娘は？

ともかく二人には、俺が何でも一つ願いを叶えると云う条件で、何とか納得してもらった。まあ、あの二人だし、そこまで凄い事は要求してはこないだろう。

トントン

考えに耽っていると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「勇者様。お呼びに参りました」

予想通りセイナーレが、俺を呼びに来たようだ。

「 ああ

俺が返答すると、セイナーレは扉を開け部屋に這入ってきた。

「 勇者様。そろそろお時間となります」

そう言つとセイナーレは、俺の部屋を見回した。

「 他のお一方は、こけらにいらっしゃらないのですか?」

セイナーレは、既に雪緒の部屋に向かつたのだろう。雪緒と絆は一緒に部屋で暮らしていたのだが、部屋に居ない場合には大概俺の部屋に来ていた。なので、二人が居ないのが不思議だったのだろう。俺はその疑問に素直にセイナーレに答えた。

「ああ、二人は既に逃げて貰つている」

「 そ..... そうですか.....」

セイナーレは驚きはしていたが、そこまで大きな反応では無かつた。

「 余り驚かないんだな?」

「そんなことはありません」

もしかしたら、薄々気が付いていたのだろう、何せ俺たちに、こ

の世界で一番接してゐる人間だ。

「……そつか。で、伝えに行かなくていいのか？」

「私では、勇者様にはとても、敵にそつにはありますから」

俺はふと思いついた事を訊いてみた。

「なあ、暫くこの部屋に留まつてくれないかな？」

彼女は不思議そうな表情を浮かべていた。

「……どうこうことでしょうか？」

「この国には恨みがあるが、仕事とはいえ、セイナーレには世話をなつた事は事実出しな、その礼みたいなもんだ……」

仕事とはいへ、俺たち三人はセイナーレに一番世話になつたのだ。
……これも甘い考え方のかもな。

「そうだな、言い訳がたつよう、ここの部屋の扉を魔術で一時的に封印しておこうか」

俺は、何も云わぬ押し黙つたセイナーレを無視して、部屋を出て扉に封印の魔術を掛けておいた。昼過ぎ位には解けるよにしてはおいたが、魔術師でもない彼女が出る事は暫く無理だひつ。

……これは彼女への礼と言つよりも、俺のエゴだらうな。俺は苦笑いを浮かべながら、謁見の間に向かつた。

謁見の間にたどり着くと、扉の前には一人衛兵が立っていたが、俺を止めるような事は無かつた。俺は衛兵を気にせず扉を開けると居るわ居るわ、この国の有力貴族共が。

流石は年に一度の最大行事、さらに勇者公開も相まって、この城から離れた領地の貴族も集まつて来ているのだろう。

更に、見たことあるような、無いような騎士やら魔術師たちもワラワラと並んでいる。この場所に立つて居るつて事は、それなりの地位にいる人間だろう。

奥の方には、忌々しい王様と宰相、その横に長身瘦躯のイケメン、ガフフォークが立っている。壯觀な光景だ。つまり今ここに、この国 の重要人物が集結しているのだ。

笑いが込み上げてくる。こゝまで予想通りになるとは。俺は込み上げる笑いを噛み殺しながら、扉にコツソリと魔術を仕込み、王の前に進んでいった。

周囲は、俺の事を怪訝そうに見つめながら、コソコソと「アレが勇者か」等の会話が聞こえてきた。だが、こちらも俺の行動を止める人間はいない。恐らく『隸属の魔術』を信じきっているのだろう、俺達には手を出せないと。王族の命令には絶対遵守らしいしな。

……いや、寧ろ自分達に手を出してくるなど、考えてすら居ないのかもしないな。

俺は王の前に立つと、恭しくお辞儀をした。

「麗しく国王陛下。」の度は私にこのよつた場を用意していただけ
るとま

俺は皮肉の心算で、Hセ敬語の言葉を言った。王は訝しげな表情
を浮かべながら、俺に訊いてきた。

「……あの一人の勇者は如何した?」

嗚呼 やつぱり聞いてくるよね。俺はその問いに、素直に答え
た。

「はい。既にお一方は私が逃がして下ります」

「 なにつー?」

王様は、引きついた表情を浮かべた。

「ど、どうこいんだ! おいー こやつ等を浮びに行つた侍女は
どひしたー?」

王は周囲に怒鳴り散らすように言つてゐる。

「セイナーレ……侍女でしたら、私の部屋にて拘束させて頂いてお
ります」

「 なつ!」

王は俺の言葉を聞き、絶句している……。しかし、気を取り直したのか、俺に向かつて言った。

「ふ、ふん そうだな、だつたらお前から問い合わせばいいのだ」

ふむ、俺に『隸属の魔術』を発動させる心算なのだろう。

『この者を、愚かなる者に鉄槌を』

へえー？ それが発動きっかけなのか。俺は関心しながらも無反応でいると、平然としている俺を見て、傲慢そうな王の顔は、焦りで歪んでいた。

「ど、どうこいつだと！？ 『この者に鉄槌を…』」

人の焦った顔って愉快だよね。それが尚の事嫌いな人間なら。込み上げる笑みを噛み殺しながら、俺は親切に教えてあげた。

「無駄ですよ国王陛下。私には魔術は通用いたしません」

まあ、魔術無効なんて、信じられる物ではないだろうナゾね。

「なにを莫迦げた事を… 鉄槌を…』」

もの凄く間抜けだな。笑いを超えて呆れてくるよ。

「 グツ。ガフオーク！ じやつを拘束しろ」

「ハツ！」

王はガフオーグに命令して、俺に差し向けてきた。……おいおい、結局力づくですか。高が知ってるね。

俺は事前に自分に掛けた強化魔術のお蔭で、バックスティック一つで難なく、掴みかかつた手をかわした。

事前情報で、俺の事はたいした事無いって聞いていたんだろうな、嘗めきつていたガフオーグの動きは、然程たいした事無かつた。

「 なつ！？」

「ダメですよ。格下と思つている相手でも本気出さなきゃ」

ガフオーグは傲慢そうな顔してるし……って、これは俺の考え方？
イケメンむかつく、イケメンむかつく、イケメン死ね。氏ねじや
なくて死ね。

「言ひじやないですか。獅子は兎を狩るにも崖に落ちるつて……あれ？ なんか違つたつけ？」

俺の煽りに、ガフオーグは顔を歪めていた。見下していた相手に見下されるつて、さぞ不愉快だろう。

「な、なめるなつ！」

おお！ 腰に佩いていた剣を引き抜きましたよ。流石は《騎士のオブ・ナイツ》こんな場所でも帯剣が許されてるんだな。

しかしこの場で、無手の相手に抜刀するつてのは、立場的にビビつなんでしょうね？

それにしても、怒りに歪んだイケメンの表情つて最高ですね。そ

んな益体も無い事を考へてゐると、切りかかってきた。……おいおい、俺を切り殺す心算かよ。まつたくそんなに精神弱くつて、よくその立場にいられるよな。

ガキッン！

金属が砕ける音が響いた。

「 はあ？」

そんな間抜けな科白を吐いたのは、ガフオーラだった。俺はただ今上半身 金属化しております。『無詠唱』による魔術、肉体の一部分を鋼鉄化させる魔術。現在俺の上半身は、オリハルコンより硬くなっていますよ。

かの有名なお方は仰りました。『かわせないなら、受け止めれば良いじゃない』

ありがとう、ジニゾのマリーさん。

俺はいくら肉体強化したとはいえ、大陸最強と言われるガフオークにまともに殺り合えば、現状勝てるわけが無いだろう。だつたら勝てなくとも、負けなければいい。

まあ暗殺とかだったら、余裕で殺せると思つけどね。ただ暗殺で死ぬなんて、つまらない結果を俺は求めちゃいない。

そこで、勝てなくとも負けないと云う手段をとる為に、俺は硬化所謂ア〇トロンを思いついた。ただこれ、硬度と比例して重量も増すので、まともに動く事も叶いません。実戦じゃまともに使う事が出来ないな。そこまで似なくても良かつたんだけどね。……つ

て、あれ？ これだつたら、全身硬化しても一緒に無かつたじゃないか。

ともかくお蔭で、ガフフォークの聖剣は、彼自身の膂力と俺の硬度差があり過ぎた為 見事に砕け散りました。

ああ、もつたひない。日本人ならこの精神『M O T T A I N A I』あとで回収できるのなら、回収したいな……。

そんなどうでもいいことを、どうでも良くなさそつな真面目な表情で、俺が黙考していると。

「 な、なにをした！？」

ガフフォークは、困惑した表情を浮かべ、折れた剣先を見つめながら訊ねてきた。

「いや、なにして、俺の体の一部を硬くしたんだよ」

……あれ？ なにこれ、勘違いされそうなイヤらしい科白が出てきたぞ。体の一部が硬くって……おいおい自重しろ、俺自重。
俺の答えが気に入らなかつたのか、ガフフォークは怒りで顔を真っ赤にして、俺に食つて掛かってきた。

「ふざけるなつ！ これは陛下から授かつた聖剣だぞ！」

ああ、やつぱり聖剣でしたか。うん、後で回収しておこう。

「あー、そうでしたか。それは大変ですねー」

「え、貴様つ！ 嘗めているのかー？」

更に顔を赤くして俺に怒鳴ってきた……だんだん相手をするのが面倒臭くなってきたな。俺のイケメン嫌いも相当なものですね。さて、そろそろ、計画を実行に移すとしますか。俺は周囲に聴こえる様に、大声で言つた。

「初めまして皆々様、私は今代の勇者として、召喚されました雪村遙と申します。ただ、私……いえ私達は望んでこの地に居りません。なので、我々は勇者としての立場は放棄させて頂きます」

突然の俺の言葉に、周囲に居る全員が声を失っていた。理解し切れていない人間が多いのだろう。俺はそれを気にも留めずに、言葉を続けた。

「それ故に今後、私の様な存在が出ないよう、処置させて頂きます」

パチン！

俺は大げさに指を鳴らした。すると城の各所でゴゴゴゴッとも、地響きのような音と振動が襲つてきた。

城の各所に仕込んだ、『次元の消失』^{ディメンション・ゼロ}を発動させた。いきなり空間が消失するのだ、失った空間が自重に耐え切れず崩れたのだろう。その際もしかしたら、巻き込まれた人間もいるかもしないけど、そんなん知らんがな。

一応俺の部屋は今まで、念の為に強化魔術を仕掛けていたので、セイナーーは安全だらう。

俺はこの為に三日間も、指を鳴らす練習したものだ。實際は鳴らさずに発動させる事は出来たのだけど。まあ様式美って重要だし、なにより『カスツ』なんて失敗したら目にも当たられない。

……想像したらみつともなくてゾッとするな。うん、上手く出来てよかつた。

ちなみに、ここまで騒ぎを起しても、誰も謁見の間に駆け込んで来ないのは、這入る時に扉を俺が封印しておいたからだ。

「ああそうだ、それと、この近隣に居住区を持つ貴族様方には、私共の旅立ち資金として、資産を頂きましたから」

うん、この場に居る大半の貴族が、一文無しとなるのだ。まあ屋敷とか土地は残してるから勘弁してね。俺の言葉を聞くと、先程まで絶句していた貴族達は青くなっていた。平然としている者も居たが、それはここから離れた領地の人間なんだろう。静けさから戻ると、俺を轟々と批難してきた。

……貴族つて奴は、わかりやすいな。先程まで傍観に徹していた連中が、今も俺に掴みかかってこようとしている。周囲の騎士や魔術師も命令されたのか、拘束しようと襲い掛かってきた。俺はそれを無視して言葉を紡いだ。

「それでは申し訳ないと思い、私からはこちらを皆様に用意いたしました」

男も、女も、若からうが、老いていようが、騎士だろうが、魔術師だろうが、貴族だろうが、王族だろうが、それが侍女であろうが、ここに居るだけで皆等しく俺の敵だ！。

態々これを使う為にこの日まで、この糞な国に留まっていたのだ。皆様、俺の手の上で踊ってください。

ああ、仕上げだ。

パンツ！

俺は手を振り上げると、胸の前で拍手を打つた。
かしわで

俺を除いた全員が、叫び、苦しみ、しゃがみこんだ。味わった痛みは相当なものだろう。なんせ俺がそう設定したし。

た。――――――――――――――――――――――

「…………なにを…………した」

「この中で一番痛みに強かつたのか、這いずりながらもガフフォークが、息絶え絶えで訊ねてきた。ていうか、同じ様な科白何回いつてんだコイツ？」

俺はその問いに、全員に聽こえる様に答えた。

「はい。皆様に差し上げたのは、《永久なる隸従》と云う、私が生み出した呪いです。効果としては、皆様がご存知の《隸属の魔術》の強化版だと思つてくれて構いません。つまりは皆様に、その呪いを行使したと言う事です。

皆様ならこの意味……わかりますよね？」

これは、解除の方法を探つてゐる時に、解除の方法はわからなかつたが、扱う方法だけならすぐにわかつたので、何かに使えると思つた。兄に云ふ名づけ。

改良していた、呪いと云つ名の魔術。

いつて事。絆だつたらもしかしたり……多分……恐らく……せつと、解除できるかな？

あと、これも発動させるのに、態々拍手なんて打つ必要なんか無いんだけどね。発動するってわかり易くする為に、敢えて行いました。

俺の言葉を聞いても、特に反応は無かつた……反応すら出来ないほど弱つているのだろ？

「これはお願ひでは無く警告です。今後私達に関わらない事を誓つて下さい。そして頂ければ、私達も関与いたしません。

まあ、誓わなくても結構ですけど、その際はわかつてますよね？」

俺は周囲の目を無視して、王の方に向かっていくが。ガフフォークも、そして周囲の人間も、息絶え絶えで俺を止めに入るような事は無かつた。いや、まともに動く事すら叶わないのだろう。

俺は前に立つと、椅子の中で蹲つている王に向けて問うた。

「では国王陛下。誓つて頂けますか

」
「…………」

王は押し黙つて答えなかつた。俺はそんな事を気にせず、一ツ口笑みを浮かべ再び訊ねた。ただし、目は笑つていない。

「誓つて頂けますね？」

「…………」

「ふむ　では仕方が無いですね

そう言つと俺は、再び拍手を叩いて両手を振り上げると。王は慌てた様子で答えた。

「わ、わかった！ わかったから、それだけは止めてくれ！」

言質は取れた。それを聞いた俺は、周囲に聽こえるよつと声を張りながら言った。

「ありがとうございます。皆様も国王陛下のお言葉を聞きしましたね……ああそれから、約束を違えた時には、先程の倍の痛みが襲りますから、この部屋に居る全員に」

俺の言葉を聞き、辺りに居る人たちはビクッと震えた。

「王の責任は民の責任ですから、流石に何も知らない一般市民に味合わせるのは酷ですが、せめてここに居る人たちには、連帯責任として味わって貰わないと。ここに居る皆様、先程以上の痛みを味わいたく無いのでしたら、是非そつならない様、国王陛下を止めてあげてください」

ここにいる人間は、俺の暴論とも言える科白を聞きながら、手を出すことも叶わないでの、怯えた目で俺を見つめるだけだった。先程の呪いを味わいためにも、ここにいる全員が必死で止めに来るだろつ。ここにいるのは、この国を占めている貴族どもだ、王といえど無視などできる筈も無い。

因果応報と云つものだ、ただ殺すなんて、そんな樂かつ心優しい事なぞしない。そう俺は、約束を守る心算などない。

定期的に、あるいは突然に、呪いの力を発動させてやる心算だ。

痛みに、恐怖に、そして何時来るかわからない死に、怯えて暮らしていくがいい。

さりに今まであつた金ちからを奪つてやつた。金が無くなれば、誰も寄つて来なくなるかもしない。尚の事、兵や侍女など雇えやしまい。國民から無理な徵収などすれば、人は離れていく。そうなれば國は崩壊するしかない。今までのような生活は出来なくなるだろ。金が無い者の苦しみも味わえ。

そして、勇者を召喚しましたが逃げられました……いいねいいね。ここまで来てそれは大恥だ。仮にも神光國家を名乗っているんだ、その様な国が勇者に裏切られ逃亡されました。國としても權威を問われるだろう。神光國家の名折れもいいところだ。他国に対しても示威行為のため、既に勇者召喚を大々的に公表だつてしている…。その結果がこれだよ。權威失墜。最高ですね。

ああ、あとそうだな。この前入手した書類を、やつぱり他国に流すのもありだな。売つて面倒めんどうになるとへりだつたら、匿名で流したつていい。

この国がどうなるうと知つた事じゃない、寧ろこれから苦しむ様子を想像すると、愉快でしようがない。よく言つ『人の不幸は蜜の味』、それがこの國の人間なら尚最高だ。

愉悦に歪んだ笑みを隠しながら俺は言った。

「それでは皆様、もうお会いする事は無いでしょうが、『健勝で』

そうだ、簡単に死んでなんかくれるな、出来る限り長く生きて苦しんでください。

そう言い俺は、這入ってきた時と同じ様に恭しくお辞儀をすると、

再び拍手を打ち、《光学迷彩》^{（インビジブル）}を使用した。これから起ころる生き地獄の始まりとして、消える前に再び呪いを発動させてやつた。

どこかの莫迦が血迷つて、追つてくる可能性を考えて消えてみたが、これは正解だったかな？手の内を晒すのは余り好きではないけど、これで更に俺を警戒してくるだろう。

というか、あの激痛の中で俺が消えていくのを、確認できた人がどれだけ居るのか。

窓に向かう途中に周囲を見渡してみたが全員昏倒して倒れこんでいるようだ。身じろぎ一つあげる人は居なかつた……あれ？やりすぎですか？氣絶なんかしたら意味無いじゃん。

俺は、気絶しないギリギリの力の加減を考えながら、窓から外に飛び出した。

……あつ！ 聖剣の破片回収するの忘れた！

俺は無駄にカツコつけていて、うつかり忘れたしまつた事を、一日後悔する破目になつてしまつた……。

第十一話 僕自重。（後書き）

「じま」が、第一章の召喚編となります。

今後の展開を考え、敢えて殺さずで書いてみました。

名前付きのキャラは、今後もしかしたら出てくるかもしれません。

勢いと思いつきで書いてきたので、矛盾やら色々と統合性の無い作品になってしまい。

それでも、「じま」で読んで下さって、ありがとうございました。

次からの第一章が、一応の本編である冒険編となります。
もし宜しければ、今後も付き合つてやってください。

第一話 欲しがりません勝つまではー（前書き）

漸く新章に入れました。

ネタと云つか、プロット自体は出来てはいるのに全然進まない……。

毎日及び短期間で更新出来る人は尊敬します。

第一話 欲しがりませを勝つまでー

俺達はアレからずぐに領流したあと、国を出る事にした。少なくとも國に留まつていっても、害になることはあつても、利に成るようなことは無いだろうから。なるべく面倒事になる要素を減らしておこうかと考えたからだ。

旅に必要な物は事前に俺が、思いつく限りの物を買って鞄の方に仕舞っていたので、すぐに街を出立できた。

まあ、なにか必要な物が発生したら、何処でもドアで戻る事も出来るし……つて、あれ？ よく考えたら、ある程度進んだら街に戻つて宿屋に泊まるつて方法もあつたな……うん、考えない事にしよう、今後何があるかわからないし、何事も経験だ。べ、べつに買つたものが、勿体無いとかでは無いんだからね！ そこんとこ間違えないでよ！ ……フ、フン。

「といつて、俺達は野営の真つ最中でしたー」

「……お兄ちやん。だれにいつてゐの？」

ヤバイ、俺の独り言バッヂリ聞かれてました。なんとか誤魔化さなくては……。

「ちや、ちやうねん！ ワテはお茶の間の皆様に向けて、発信してただけやねん」

……正直に言つてしまつた！ ドジが誤魔化してんねん。

「そりなんだー」

あれ？ あれで納得してくれたよ。素直すぎるのもお兄さん心配になるな。

ともかく俺は気をとり直して、周囲を見渡した。ここは プレクスタ より半日程北に歩き進んだ、街道外れの森の側で野喰をしていた。

すでに辺りは日が落ち、焚き火の炎だけが明かりとなっていた。ちなみに、火をつけることに関して言えば、三人ともこの世界で云えば魔術^{チート}反則なので、簡単につけることができ、そう言つた問題で悩む事など無かつた。

追跡の可能性を考えても、街道を堂々と行くのは……と最初は考えたが、土地勘が無い俺達が森なので迷い込んでも困るので、そう言つたものを差し引いても、安全を考え街道を進むことにした。

強い魔物なんかと出会うよりは、まだ人の方の対応が俺にとっては楽だつたし……俺はギルドの依頼で外には出た事があつたが、雪緒や絆は外に出るのも初めてなら、魔物を見るのも初めてになつてしまつので、色々考慮した。

ちなみにここまで魔物に出会つ事は無かつた。いや、違うか、俺が出会わないようにしていた。俺が事前に開発し編み出した遠視魔術で、進路上の魔物を排除していたからだ。サーチアンドテストロイ。

チョット過保護すぎるかとも思わなくも無いが、何も無いのが一番いいからね。

流石にこの時間になると、街道に行き来している者はいなかつた

建国記念祭当日という事で、昼間歩いている時は、結構な人が行きかっていたが、魔物は大概が夜行性ってことで、皆安全策を取つて野営しているのだろう。

建国記念祭 アレからビッグなったかは知らない……今回の祭りのメインイベントだつた勇者のお披露目は、当人だつた俺達が逃亡した事でご破算になつただろし、王族など国の代表共も俺が気絶させてしまつたので、それ所では無くなつてしまつただろうな……まあ、俺が気にする事ではないか。

ともかく今は、雪緒が料理の真っ最中です。俺もある程度なら出来なくは無いので、手伝おうと申し出たが、やんわりと断られた。なんでも、乙女の戦場らしい……うん、戦場なら仕方ないな。

今作つているのはクリームシチューみたいだつた。俺の所まで牛乳の甘い香りが漂つてきてる。

材料や調理道具自体は先程も言つたが、鞄の中に放り込んでいたので、大概の料理は作る事が出来るだろ。

この世界では、食べ物自体は元の世界と幸いな事に似通つていた。ただ、形や大きさ色などは違う物も多かつたが、牛乳も味自体は牛乳そつくりだつたが、牛の乳なのかはわからない……知らないって事も幸せだらうから。

ともかく〇次元鞄 は、保存の利くものから、保存の利かなそうな食材様々がしこたま買い込み放り込んだ。

保存の利かないものは、最初は買うのを控えようかと思っていたが、城に居る時に色々試した結果 鞄に入れておくと全く劣化しない事がわかつた。

理由？ 理論？ そんな物は知らない！ 便利だつて事で俺は納得しておいた。まったく自分で作つておきながら、ブラックボックスな部分が多いけどね……。

謎が多いほうがいいんだよ。……ふふ、ミステリアスな俺に惹かれるだろ？。

調理道具は、フライパンや雪平なべ等、日本で存在した物で売つていなかつた物は、武器と同じ様に俺が作つた。これは日本で実際に使つていたので簡単に作れたが、テフロン加工なんて物は詳しく知らないので、魔術でくつつかない様に適当に加工しておいた。多分これを売りに出せば、一攫千金を狙えるかも知れないな……いや、まあいいか、金なら腐るほど持つてるし。

雪緒は鼻歌を歌いながら、鍋をかき混ぜていた……って、あれ？ 女の子の手料理つて初めてじゃないか俺？ や、やだあ、ドキガムネムネしてきたわ。

と。益体も無い事を考えていると、横から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「 かくん、遙くん。」飯できたからそろそろ食事にしよう

おおつと。俺が妄想の海にトリップしている間に、料理は完成していただようだ。

「ああ。わかつた」

俺は返事を返すと、雪緒と絆が居る焚き火に向かい、食事にすることにした。

「はい。どうぞ」

そう言われて、俺は雪緒から器を受け取つた。器に注がれたクリームの中に、真っ赤なジャガイモもどきに青い人参もどき、玉葱は

玉葱のままでも鶏肉によく似た、淡白な味の肉が入っていた。

野菜はともかく、肉は何の肉かはわからなかつたが、わかつてしまつたら今後食べなくなつてしまいそうだったので、敢えて目を瞑つた。知らぬが仮。

「どう……ですか？」

雪緒は不安そうに、俺達に味を訊いてきた。

「うん。つまり

「ゆきおおねえちゃん。おいしいよ」

俺と絆が答えると、それを聞き雪緒は安堵の表情を浮かべていた。

「そり……ですか。よかつた……」

「」の際にパンも欲しくなつたが我慢した……贅沢は敵！ 欲しがりません勝つまでは！ ただ買うのを忘れただけなんですけどねー。明日の早朝にでも街に戻つて買ってこよう……。

「」む、料理は美味しいございました。畠田秀麗、密姿端麗、さらには才色兼備で武道にも精通している……ですが雪緒さんは穴がないなー。

雪緒も絆も粗方食べ終わつたみたいなので、今後の方針を話し合つておこうと思ひ、言葉を切り出した。

「……そして、で、今後の事を話そりかと語つただけだ

「今後のこと……ですか？」

雪緒は首を傾げながら、俺に訊いてきた。絆に関して言えば、食事が終わると俺の胡坐あぐらをかいた上に座つてきていた。その際に雪緒にひと睨みされた事を忘れてはいけない……。

「ああ、城を出る時に話したけど、これからの方針をね」

絆は俺達の会話に興味が無いのか、鞄から俺の携帯を取り出し、胡坐の上でアプリのテ○リスをピコピコとプレイしていた。

「一応先にも言つたけど、俺達がこれから向かおうと思つてはいるのは、魔術都市マクストマクストを目指す事を考へている。もしかすればここなら、元の世界に帰る方法の情報があるかも知れない……。ただここは、神光国家ブレクスターからはかなり離れているので、まずは中継として北にある、自由都市フリーリーに向かおうと思つけどいいかな」

俺は元の世界に帰る方法を考へてみた……少なくとも、俺達を召喚したあの国ではその様な情報は無かつた。だとすれば、と、考えた。あの召喚で使用されたのは魔法陣、それならば魔術都市と呼ばれる場所でなら、帰る方法がわかるかもしれないと考えたのだ。可能性……でしかないのだけど。

それにこれから、向かおうと考えている自由都市フリーリーは、中立都市なので俺達が向かうにも都合がいいだろうから。

「はい。わたしは詳しい事はわからないので、遙くんにおまかせします」

「ああ、ありがとう。それで聞いた……と云つか調べた情報だと自由都市フリーリーまでは、まだここから歩いて一週間ぐらいかかると思つ

この世界では車や電車、飛行機などは存在しないので、おもな移動手段としては徒歩、或いは馬、馬車などである。まあ魔物が跋扈しているのに路線など引ける訳も無く、飛行機など存在しても空とぶ魔物の格好の餌食だろう。

しかし遠いな……しかも、わかつたのは距離ではなく、徒歩だと大体何日かかるって情報なのだ。この世界にはキロとかマイルとか、長距離を図る単位が無いらしい。抽象過ぎてわかりづらい……せめて何キロかわかれればペース配分も考えられるのにな。

「……遠いんですね」

「ああ、ほんとにな……」

次の自由都市では馬車一式べらば、買い揃えようと俺は心に決めた。

第一話 欲しがりません勝つまではー（後書き）

文章が冗長気味に……殆んど話も進まず、私に文才があれば、もっと綺麗に纏められたのでしょうが。

第一話（前書き）

今回サブタイが思い浮かばなかつた……

第一話

自由都市に向かい始め、半分の道程が経過した……。街道を真っ直ぐ進んでいるだけあって、特に問題も無くここまで歩いてはこられた。

少なくとも俺達を追つてきている存在は、特に確認は出来なかつた。向こうは今、それどころではないだろうが、それを信じて楽観視できるほど悠長にも構えてはいない。

例えば俺は、定期的に魔術で周囲を確認したり、思いつきに呪いを発動させてたりしていた……まあ、呪いは俺の憂さ晴らしも兼ねているかも知れないが。

ともかく、そう言つた問題は無かつたが、違つ問題が発生した。

「遙くん。お願いします！」

「お兄ちやん。絆からむお願ひ……！」

それは、お風呂である。俺達は城に居た時には、毎日では無いことはいえ、風呂に入る事は許されていた。

なんでも、この世界では風呂は貴族や王族など、裕福や高位の存在でしか入らないものらしい、俺達は隸属の魔術を掛けられてはいたが、一応の勇者の扱いとして風呂に入る事が出来ていたのだ。

大概の人は、濡らした布で体を拭く程度で、俺達もここまでそうして来たが、日がな一日歩いており、更に日中は日差しが暑くて汗もかいてるので、男の俺はともかく雪緒や絆は、流石に耐え切れなくなってきた。

此方の世界の住人だつたら、それが当たり前なかも知れないが、俺達日本人は毎日お風呂に入っていた。場合によつては汗をかく度にシャワーを浴びたりもしていたが。そついた環境に慣れきつている俺達には、この状況はかなり酷だろう。

といつた切なる二人の要望により、俺が風呂を作る事になった。

まあ俺も風呂には入りたかったので、このお願いは^{やぶ}者かでは無かつたが。

「……わ、わかつたから、チョット抑えて抑えて」

俺達は余り目立たないよう、街道の外れに立つてゐる。そこで俺は、二人に迫られるように頼みこまれていた。

二人とも今にも襲つてこんばかりに、鼻息荒く目が血走つてゐる
……うう、怖いよう。

「チョット今から創るから、待つてて」

ふいー、ふいーと、息荒く俺を見詰めて來てゐる ヤバイ、創^ヤらなければ殺^ヤられる。

俺は恐怖に慄きながらも、材料となりそうなものを鞄から探つた。

浴槽を創るならステンレスか……だとすれば鉄とニッケルにクロムが要るが。ニッケルにクロムなんて物は持つていないし、更に言えば鉄も、材料に成る程量を持つてはいない……手持ちの素材で代用して、魔術加工するしかないだろ。

俺は鞄の中からミスリルを取り出した。鞄の中身の金属は、殆どが希少金属であり、その中でも最も量持つてゐるのがミスリルだつた……。

「鉄を街まで買いに　いや、今ここを離れようとしたら殺^やられる
……はあ、まあいいか、使う予定は特に無かったし　しかし、こ
れを売りに出したりしたら幾らになるんだろうな……？」

二人を一瞥して見ると、とてもではないが、今から街に買い物に行
くのは無理だと判断した。仕方無しに俺はボソリと呟きながら、
このまま創る事にした。

ゴツソリと鞄からミスリルの金属塊インゴットを取り出すと、武器を創つた
時のように魔力を通し始めた。すると次第に輝きだし　四方2メ
ートル程の浴槽に変化していった。

日本に居た時の実家の浴槽をイメージしたので、それなりに大き
な浴槽が完成した。

脱衣と周囲の田隠しの為の囲いは、テントで代用すればいいだろ
う。そう考え鞄からテントを取り出し組み立てると、先程創つたば
かりの浴槽を魔術で浮かせ中まで運んだ。ちなみに浴槽を浮かせた
魔術は、財宝を盗む際に終盤に編み出した物だ、最初からあれば、
もつと盗むのも楽だつたんだろうな……。

ともかく俺は、横にいる一人の期待とプレッシャーに耐えながら、
次にお湯を張る事にした。

流石に日本に居たときでも、熱湯を出す魔術の類を、アニメやゲ
ームで見たことが無かつたので、熱湯を出すという魔術上手くイメ
ージは出来なかつた、なので水を張り直接火で温めることにした。
俺は浴槽に狙いを定め水を注ぎ込むと、次に浴槽自体に熱を送り
込んだ。

幾らなんでも浴槽の水の中に、炎の魔術を叩き込むのは避けてお
いた……水蒸気爆発怖い。それに今回使用したのは、魔力伝導率が

鉄とは比べ物にはならない程高いミスリルである。こいつた方法が一番最適であろう。

すると然程時間がただずには、浴槽から湯気が漂つてきた。

俺は湯船の温度を確かめようと、浴槽に手をかけると……。

拳法家よろしく悲鳴をあげた　俺は莫迦か？　もの凄く熱くなつていた浴槽に触つて、おもいつきり火傷した。手の皮べろーん。

「……え？ は、遙くん？」

「……お、お兄ちゃん？」

一人とも俺の様相にビックリしていた。まあ、あんな大声を出して驚かない方が無理だろう。俺は手を隠すようにして、火傷部分に治癒魔術をかけた後、安心させるように笑いながら答えた。

「ちょっと驚いただけだから、大丈夫大丈夫」

俺が火傷していた方の手を、ひらひらと振りながら言つと、それを聞いて一応は納得してくれたのか下がつてくれた。

ふう。俺は気を取り直すと浴槽の部分を冷却させ、湯船に手を突っ込みかき混ぜながら温度を確認した。

「……うん。温度はいい感じだな ょつし、風呂は完成だ」

俺が雪緒と絆に呼びかけるように言つと、一人は目を輝かせながら此方に寄ってきた。

「ほ、本当ですか？」

「やつたあーお風呂だ」

「ああ、ただチョットまだ熱いかも知れないから、水でも足して調整してみて」

一人とも水の簡易魔術程度なら扱えるので、特に問題にならないだろう。

「じゃあ俺は、外で周囲を監視しているからゆっくり入っておいでの今にもウズウズとして、お風呂に入りたそつこしている一人に鞄を預けると、俺はテントから外に出て行つた。
しかしさか、ミスリルで浴槽を創る事なるとは……まさにアンタジーだな。

「じゃあ、絆ちゃん。一緒に入りましょう」

「うんー。」

などとテントの中から会話が聞こえてきたが、俺は聞こえない振りに徹して、周囲を警戒した。

流石の俺も、雪緒と絆の入浴を覗く気は起きなかつたし、会話を

盗み聞く心算も無かつた。試してはいなが、俺の《光学迷彩》が彼女達能力の一《危機感知》を上回るかわからぬし、だからといってそれを試す氣にはならなかつた。というか怖くて出来ません。

ともかく俺は周囲を警戒するよう、辺りに生物がいればわかる様に、探知の心算で《魔術感知》と併用して魔力を飛ばしてみた。これで生きている生物がいれば、何かしら魔力の歪みを感じるだろう。それを辺りに放つてみると、森の奥のほうから、何かの生き物の反応が返ってきた……。

「ん？ 生きているモノにしては反応が小さいな……？」

反応の見たサイズの大きさからして、成人男性ほどの大きさでは無いだろうが、生きた生物の反応が感じた。ただ力の反応としては、かなり弱弱しく感じた……。

周囲は既に薄暗くなつており、更に森の中なので遠視の魔術でも、木々などが邪魔で奥までは確認できない。

「んー、何なんだ？ まさか子供……じゃないだろ？ な？」

魔物が潜んでいるかもしけない森の奥で、子供がいるとは余り考えられないが、ただ感じるサイズの大きさからしては、可能性として十分にありえた。

俺は少し気にはなつたが、嫌な感じと共に面倒事の可能性もある。ともかく今はここを離れる事が出来ないので、確認に行くかどうかは、二人が風呂から上がつてからだ……。

第二話 困りてしまひます。

「お兄ちゃん。どうちー？」

絆は俺の手を引っ張りながら、無邪気そうに訊ねてきた。

俺は風呂から上がった雪緒と絆に、魔術での探知の件の事を話してみると、案の定確認に行く事になった。

厄介事の可能性もあるとは俺は伝えたが、興味の方が上回つたらしい。いや、興味と云うより人として心配なのかも知れないが可能性とは云え、もしかしたら人の子供かも知れないなどと、迂闊にも言つてしまつたから。

まあ、俺も気にはなつていたので、余り否定意見を言わなかつたかも知れないが……好奇心は猫をも殺す。

ともかくそにはならないように、俺は周囲を用心しながら進んではいる。

移動する際には浴槽はお湯を捨てて、テントと一緒に鞄に収納している。俺も風呂に入りたかったんだけど、後にすることになつた……まあ浴槽は、鞄のお蔭で持ち運びできるし、お湯を入れること自体は俺にとつては然程問題では無から、後でゆっくり入ることにしよう。

今は森の中を進んでいるのだが、既に周囲は夜で闇に落ち、森の中は木々の葉に空を覆い尽くされており、月明かりすら届かないので真っ暗で、まともに前を進むことすら叶わなかつたが、幸いな事に俺が元の世界から持ち込んできていた物に、LEDライトがあつ

た。これは携帯電話用に充電器として使つてきた物だが、本来の用途として使う機会が来た。

魔術で明かりを灯す事も出来たが、森に巣く魔物達は大概が夜行性であり、俺の魔術は強力すぎる為田立ちやすいので、折角ライドがあるのでから魔術を使うのは避けておいた。あるもの有効活用しないとね。

俺は右手にライトを持ち、左手には絆と手をつないだ状態で歩いており、雪緒は俺のすぐ後ろで刀を持って周囲を警戒していた。こう云う時にこそ一人の能力、『危機感知』^{アベリティ}が効果を發揮するのかも知れないな……ただそれに頼り切るというのも俺の柄ではないが。

「……遙くん。その場所って云つのはまだでしょうか？」

雪緒は周囲を見回しながら、俺に訊ねてきた。思つていた以上に森の中が暗いので、もしかしたら怖いのかもしれない。

「ああ、もう少し先だな」

「……そう、ですか」

雪緒は俺の答えに、息を吐くよつて叫んだ……。

「あれー？ もしかして雪緒おねーちゃん……『ワゴンの？』

「ムツ。そんな事はありません。そんな事はありませんとも」

雪緒は絆の質問に、ムキになつた様に答えていた。

「な、何を言うんですか絆ちゃん。わ、私が、く、暗いからって怖いわけないでしょー。」

……雪緒さん。自分で暗いのが怖いとか言っちゃつてますよ。今まで、日中にしか活動して無かつたから気が付かなかつたが、暗いのが苦手だったみたいだな。

「ふーん。そうなんだー。…………あれ？」

「ん、どうした？」

「……えつ、なんですか？」

「……あ、あそこでなにか白い影がう」いた。」

-
L

無理です

絆が森の先を指しながら、俺達の質問に答えると、それを聞いた俺達に一瞬の沈黙が訪れる　突如雪緒は絶叫し俺に抱きついてきた。

ל' עלייה, ט' עלייה, י' עלייה, י' עלייה,

雪緒は恥りながら、俺の背中に頭を擦りつけながら、ヒシッと抱きついてきている……何て云うか、色々やわらかい感触が背中に当たって、お兄さん困ってしまいます。

「えへー。やつぱり『氣のせい』だったよ」

「…………」

絆は悪びれずにそう言つてきた……しかし今の雪緒には、絆の科白は届いていないみたいだつた。

「はあ、絆。そう言つた[冗談は余り言わないよ]」

「はーい。『めんなれー』」

「うん。全く反省していませんね。絆は俺の忠告にケロッとした顔で答えてきた。絆と雪緒は城に居た時は、一緒に同じ部屋で暮らして居たので、もしかしたら知つていてやつたのかも知れない……絆何て恐ろしい子!?

ともかく俺は、抱きつかれたまま体を捻つて振り返り（俺が体を捻つても雪緒は意地でも抱きついてきた）、雪緒の頭を撫でながら慰めた。

「雪緒。大丈夫、大丈夫だから」

俺は、抱きついてきている雪緒の感触を敢えて無視して、髪を梳くしけずる様に撫で、安心させるように笑いかけた。

「ふえええええん、はるかくううん」

「白ご影も、怖ごものとかいないから……ね？」

「……ほ、ほんと?」

雪緒は上田づかいで、俺に訊ねてきた。……なに、この可愛ご生き物？ 持ち帰つてもいいですか？

半ばキャラ崩壊氣味の雪緒に、安心せざるむづけ答えた。

「ああ、本當だ。もし何かごとも俺が何とかしてやるからー。」

「…………」

雪緒は俺の答えに安心したのか、抱きつきから解放してくれたがただ、俺の右手を雪緒の手が掴んでいるんですねけど……。

「…………雪緒さん。」この手は何でしょ、うへ。

俺が右手を持ち上げて訊ねてみると。

「…………ダメ…………ですか？」

出ました、必殺上田づかー。遙はるかのダメージを受けた！

「いやいやいや。ダメではないですよ~？」

何故に俺も疑問系？ 俺も明らかにテンパつてますね。

と云つた訳で、左手に絆、右手に雪緒ヒューフォーメーションで進むことになってしまった。

……で俺、ライトは何処で持てばいいんでしょう？

第三話 困りてしまつまゝ。（後書き）

案の[定説]が進みませんでした。

「……ん？ あれか？」

ライトの先に照らされた白い物体を見つけ呟いた。

結局ここまで、風呂を創った場所から三十分近く歩く事になってしまった。

実際の距離にしてみたら大した事は無いのだろうが、夜間の森で足場も其処まで良くないとすれば、その位の時間はかかるてしまうのかも知れない。

まあその大半は、雪緒を慰めたりした為に、思いのほか時間がかかったのだろうが……。

俺は今両手が塞がっている 別に荷物を持つていてのではなく、右手に一少女（雪緒）、左手に一幼女（絆）と云つた、非常に歩きづらい状態だ。

流石にこの状況でライトは持つ事が出来ないので、今は絆にが持つて道を照らしてもらっている。というか現状の雪緒は余りアテには出来ないので、絆に任せるしかなかった。

辺りは暗くてまともに見れない上に、俺は両手が塞がっており咄嗟に動く事が出来ず、周囲を警戒しながら歩いていたのでかなり気疲れた。

俺は女の子と手を繋ぐのは嫌ではないが、いや、寧ろ大好きだが、それは時と場合による物だと、身を持つて理解した。少なくとも魔物が潜んでいるであろう森の中でする事ではない。

ともかく、俺が魔術で探知したであろう、生き物の場所にまで特に何も無く到達した。

ライトを照らした先には……何かの動物が蹲っていた。

「お兄ちゃん。あれなの？」

絆はライトを動物に向け、訊ねてきた。

「……ああ、この辺りで間違いないはず」

俺はそう答えると、感度を上げるために範囲15メートル程に絞つて、再び魔力を放ち探知を行つたが、反応はライトの先に照らされた動物からしか無かった。

「やつぱり、その動物からの反応みたいだつたみたいだな

「……そう……ですか」

「ふーん」

二人は俺の答えを聞くと、反応こそ薄かつたが安堵の表情が見て取れた。

しかし、魔術探知では大まかなサイズしかわからなかつたが、予想よりも更に小さく、人でも無かつた……まだまだ改良の余地があるな、と考えていると。

「ナビ、お兄ちゃんの言葉を聞くと、この子って弱ってるんだよね……？」

絆はそつ言ひだし、繋いでいた手を離して動物に近づいていった。

「お、おい、絆。あぶないから」

「絆ちゃん。あぶないですから離れては」

俺の雪緒の警告を気にもせず、蹲っている動物の傍らに跪いた。弱っているとは云え、もしかしたら魔物かも知れないのだ、俺達も恐る恐る近づいていった。

「……この子……犬？」

絆は呟くよつて言ひだして、俺も近づき確認するとふわふわの白い和毛に包まれ、三角の耳に尖った顔、そして三つにわかれた尻尾。

「ううん、違います。たぶんですけど狐かと……」

絆の科白に雪緒はそつ答えた。その言葉を聞き、俺も合点がいった。

「……ああ、確かに狐だな。ただ尻尾が三本ある狐と云えば」

妖怪だよな。

複数の尾の獣と云えれば、日本の妖怪の代名詞だらう。有名な所で
言えば『猫又』、狐で言えば『九尾の狐』。

しかし、ここは日本ではないし、この子は三尾しかないので、妖怪では無いのかも知れないが。というか魔物の可能性も残っている。ただ旅立つ際に事前に調べた情報だと、この周辺に狐型の魔物の情報は無かつたんだが……。

ちなみに最後まで言わなかつたのは、雪緒に妖怪を云ふ言葉に反応されても困ると思つたからだ。

絆は、弱つて小刻みに震えて蹲つている狐？ を見て、ポツリと言つた。

「この子弱つて震えてる……かわいそう

絆はそう言い、俺達が止める間も無く、狐に手を翳すと治癒魔術を紡ぎ始めた。

『慈悲の力。癒しの力よ。この子に光を』

絆の手のひらが薄く輝き、揺らぎだすと、魔術が発動した が、狐の様子が改善される事は無かつた。

「……えつ？ なんで？ なんで効かないの？」

狐は未だ蹲り、弱弱しく震えていた。

絆は、治癒関係の魔術だけは俺が使うモノよりも強力だ。それが効いていないので、絆は混乱していた。

「ちゃんと使つてるのに何で……？」

手のひらが、薄く輝き揺らいでいるといつ事は、魔術が発動しているといつ証拠なのだが。

「お兄ちゃん……なんで効かないの？」

絆は困惑した表情を浮かべ、訊ねてきた。絆の治癒魔術が効かない以上、俺が使つても意味はないだろう。ともかく俺は絆の疑問に答える為にも、魔術解析する為『魔術感知』使い、集中してみた。

集中してみたが 絆の魔術は正常に発動していた。と、なると、狐の方に何か問題があるのかもしれない。そう思い見てみると。

「…………ん？」

「…………どうしたの遙くん？」

俺が首を捻り声をあげると、未だに俺と手を繋いでいる雪緒が訊ねてきた。

「いや。なにかチョット違和感が……」

そう、なにか狐に違和感があるのだ。違和感と云つか不自然さがある。あとの状況でも手を離さない雪緒といつのも、十分不自然かも知れないが。

「違和感ですか……？」

「うーん…………あつー？」

「なにかわかったの、お兄ちゃん！」

俺が声をあげると、絆が訊ねてきた。

「ああ。なにか違和感を感じると思つたら、その狐からは魔力を全く感じないんだ」

この世界の生き物は、大なり小なり魔力を持つている。たとえ魔術師で無くとも、人は少しでも魔力を持つてしているのだ。それがたとえ動物であろうとも、この『ガイア』に住んでいる生物であるのなら、少なくとも魔力がゼロと云つて存在しないし、俺もここまで見たことが無い。

なのに、この狐からは、その魔力が全くと云つていいほど感じないのだ。

「……魔力？」

「魔力……ですか？」

「ああ。一人には見えないのかもしねないが、この世界の生き物には、多かれ少なかれ魔力を持つて生きているんだ。ただその子からは魔力が一切感じる事ができないんだ」

俺の言葉を聞いても、一人ともいまいち理解していられないみたいだつた……まあこれは、魔力を見る事が出来る俺だからこそ、わかることなんだろうけど。

「お兄ちゃん……よくはわからないけど、お兄ちゃんだったならこの子助けられるの……？」

絆に潤んだ瞳で俺に訊いてきた。

「 ああ」

俺の言葉を聞くと、絆は食いかかるように言つてきた。

「 だったらお願ひ！ この子を助けてあげて！」

絆は真剣な表情で俺に頼んできた……はあ、しかたないか。今までこの環境で、特にわがままを言つてこなかつた絆が、助けてと真剣にお願いしてきたのだ。それになにより、ここまできておいて見捨てるのも目覚めが悪い。

まあ万が一この狐が魔物であつて、襲つたらその時はその時だ。

「 ……わかつた。俺が出来る事はやってみよう」

そう言い繋いだ手を離し、絆を雪緒に託すと……いや、この場合は逆か？ ともかく俺は、狐に傍らに跪き手を添えると 魔力を移し始めた。

「 グッ。思つたよりキツイな」

誰かに魔力を渡すと云つ行為は、初めてだったので予想よりも遙にきつかった。

魔力譲渡は相手に1の魔力を渡す為に、俺の魔力を大体20～30使う事になつた。俺はこの世界の人間では、規格外の魔力を持つて居るとはいえ、それでも魔力消費量が半端ない。恐らくだが全快も無理だろうが、状態を改善させるだけでも俺の魔力の9割近くを消費する事になるだろう。

……」今までやつておいて、今更出し惜しみも無いか。俺はもう考え、魔力を一気に送り込んだ。

「ゼゼゼ……」

「お、お兄ちやん。ゼリフヘ。」

俺が激しく息を吐いていると、後ろで雪緒と手を繋ぎ見ていた絆は、心配そうに訊ねてきた。

「ふう……ああ。恐らくも、大丈夫だ」

俺は一息吐くと、安心させるように微笑み答えた。

「ほんとうへ……よかつた」

そう言ひ、絆は安堵の表情を浮かべていた。

俺は三尾の狐の状態を確認していると、突然真横の茂みがガサリと動き、黒い影が飛び出した。

「遙くん危ないー！」

何かに気がついたのか、雪緒が悲鳴に近い声をあげた、それに俺は反射的に狐を庇つようにしてしゃがみ込んだ。

黒い影は、咄嗟にしゃがんだ俺の右腕を抉り通り過ぎた……。

「グツ！」

俺は突然に襲われた激痛で、声にならない声をあげた。魔力譲渡で集中していく周囲が疎かになっていたのだろう、迂闊にも襲われるまで気がつかなかつた。

確認はしていないが、寧ろ怖くて確認できないが、右腕の上腕の部分の肉を持つていかれたのだろう、袖口から鮮血がポタリポタリと滴り落ち、真っ赤に染まっていた。あの時雪緒の声が無かつたら、恐らく俺の首が持つていかれていただろう。

ともかく俺は一時的に痛みを無視して、感覚の無くなってきた右腕を無視して、襲つてきた正体を確認した。

ライトに照らされた先に立つていたのは 漆黒の体毛に、紅い瞳、鋭い爪と牙を持つ体長1メートル程の体躯、ハイディングウルフが立つていた……。

「クソツ！ こんな時にハイディングウルフかよ」

俺は吐き捨てる様に言った。

ハイディングウルフは、 神光国家ブレクスタ 周辺で巣くう魔物だ。その名の通り隠密行動を得意として、獲物に近づきその牙や爪でもつて獲物を穿ち殺す。俺が旅立つ上で調べた魔物の中でも、この周辺に出る魔物の中では最悪の部類だろう。

「雪緒！ 周囲も警戒してくれ！ こいつらは群れで行動する魔物だ」

そう、こいつらの習性で最も厄介なのは、群れで狩りをすると云う事だ ハイディングウルフが最も得意とするこの暗闇中で、更に木々で周囲は死角だらけ、恐らく周囲に他の仲間も隠れているだろ……状況としては最悪だ。

雪緒は俺の声が届くより前に、絆を背後に庇つた状態で、俺が創つた《靈刀・雲》を濶みなく構えていた。

るか、くんを。

雪緒には俺の声が届いておらず、雲を構えた状態で何かを呴いていた……。

「 遙くんを……傷つけましたね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9710w/>

愚者は踊る

2011年11月4日16時22分発行